

中性B中間子の DK^{*0} 希少崩壊の研究

2011年 2月 2日

素粒子実験グループ

根岸 健太郎

目次

- CP非保存角 ϕ_3
- Belle実験
- $B^0 \rightarrow DK^{*0}$ の解析
- 結果
- まとめ

CP非保存角 ϕ_3

CP非保存

- CP非保存の精密測定
 - 物質優位の理由の一つ
 - CP非保存はフレーバー混合に起源を持つ
 - フレーバーに関するパラメターの精密測定が重要
 - CP非保存の精密測定はフレーバー物理の観点より、標準理論の検証やそれを超える新しい物理の手掛かりとなる

ユニタリ三角形

- CKM機構 : 弱い相互作用でのCP非保存を示唆
 - クォークとWボゾンの相互作用のラグランジアン

$$\mathcal{L}_{int}(x) = -\frac{g}{\sqrt{2}}(V_{CKM}\bar{U}_L\gamma_L D_L W_\mu^+) + h.c.$$

$$V_{CKM} = \begin{pmatrix} V_{ud} & V_{us} & V_{ub} \\ V_{cd} & V_{cs} & V_{cb} \\ V_{td} & V_{ts} & V_{tb} \end{pmatrix}$$

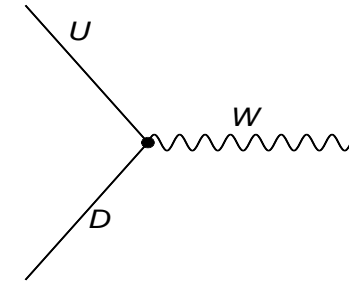
CKM行列はユニタリ: $V_{CKM}^\dagger V_{CKM} = 1$

- b列,d列に関してユニタリ条件

$$V_{ud}V_{ub}^* + V_{cd}V_{cb}^* + V_{td}V_{tb}^* = 0$$

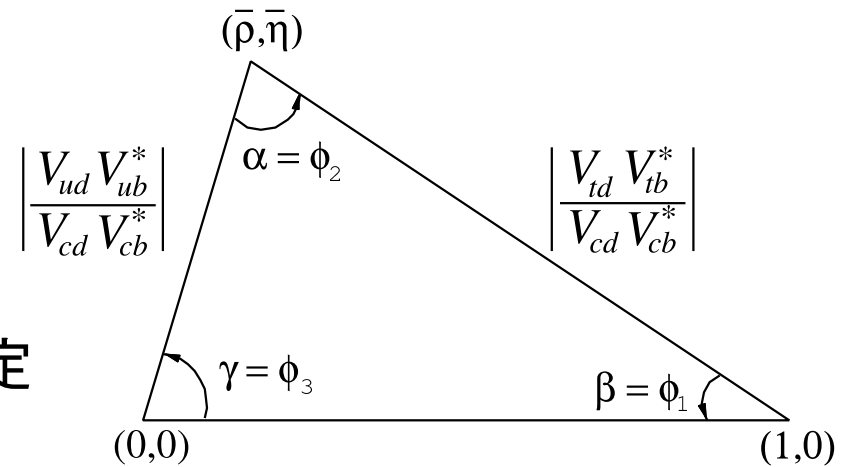
- 複素平面上に三角形を描く
 - 三角形の面積 $\neq 0 \Leftrightarrow$ CP非保存
- ユニタリ三角形の角の一つ ϕ_3 を測定

$$\phi_3 \equiv \arg\left(\frac{V_{ud}V_{ub}^*}{-V_{cd}V_{cb}^*}\right)$$



$$U = \begin{pmatrix} u \\ c \\ t \end{pmatrix}, D = \begin{pmatrix} d \\ s \\ b \end{pmatrix}$$

U_L, D_L : 左巻き成分

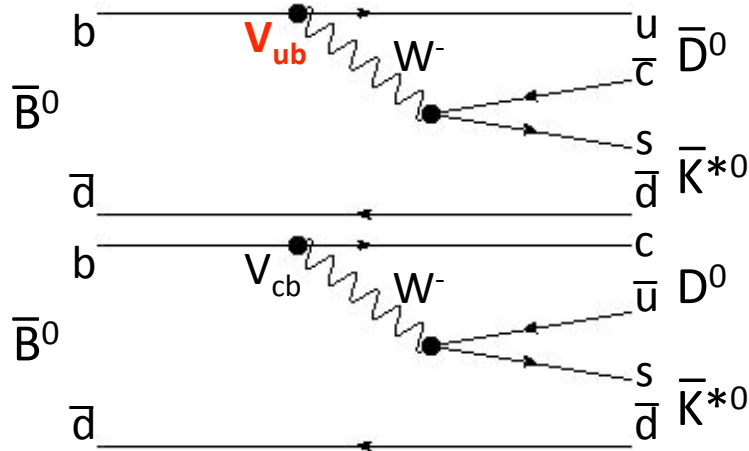


ϕ_3 測定

- ϕ_3 の測定は V_{ub} の位相の測定と同義

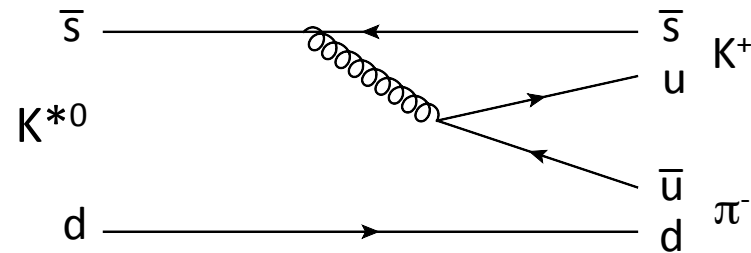
$$\phi_3 \equiv \arg \left(\frac{V_{ud}V_{ub}^*}{-V_{cd}V_{cb}^*} \right) \sim -\arg(V_{ub})$$

- B → DKを用いる



- $b \rightarrow u$ 遷移を含む、経路を持つ干渉を利用する事で ϕ_3 の効果を測定する。

- K*タグ



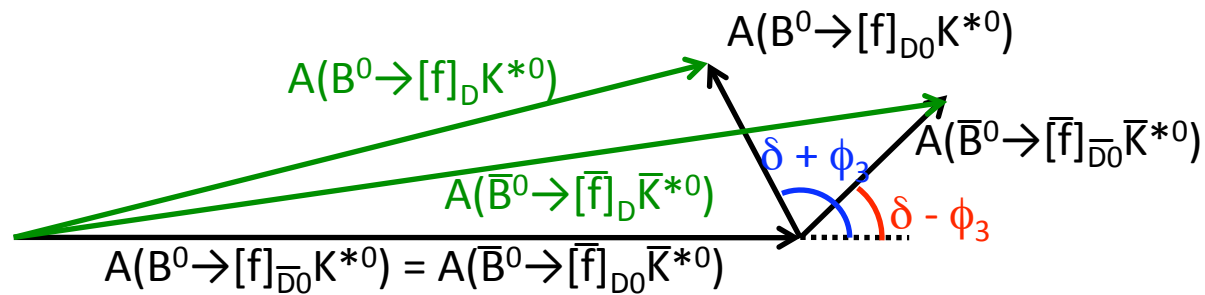
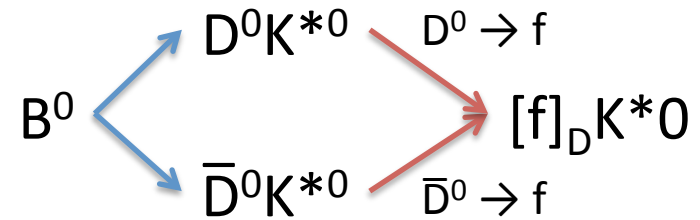
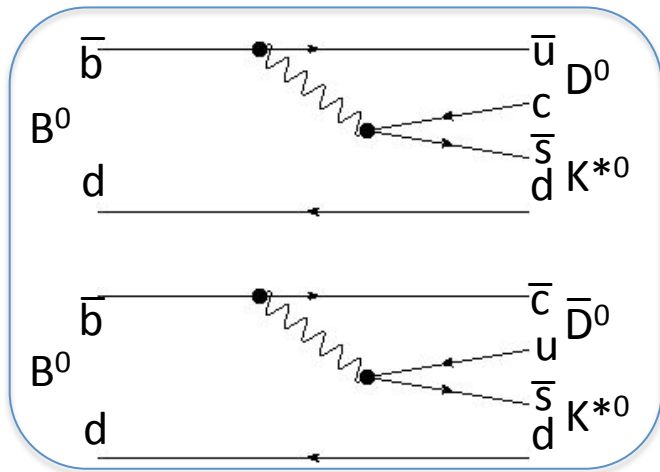
$$\begin{aligned} K^{*0} &\rightarrow K^0\pi^0 && 1/3 \\ &\rightarrow K^+\pi^- && 2/3 \end{aligned}$$

- K*を荷電 $K\pi$ で再構成する事で K^{*0} のフレーバーが決定
→Bのフレーバーが一意に決まる

B^0 - \bar{B}^0 混合の効果無しに ϕ_3 抽出可能

ADS法

- ϕ_3 測定法の一つ



δ : 強い相互作用の位相差
 CP変換で符号不変
 未知定数

ADS法 (続き)

- 典型的に求める2つの変数

$$R_{ADS} \equiv \frac{\Gamma(\overline{B^0} \rightarrow [f]_D \overline{K^{*0}}) + \Gamma(B^0 \rightarrow [\bar{f}]_D K^{*0})}{\Gamma(\overline{B^0} \rightarrow [\bar{f}]_D \overline{K^{*0}}) + \Gamma(B^0 \rightarrow [f]_D K^{*0})}$$
$$= r_S^2 + r_D^2 + 2kr_S r_D \cos \phi_3 \cos \delta$$

$$A_{ADS} \equiv \frac{\Gamma(\overline{B^0} \rightarrow [f]_D \overline{K^{*0}}) - \Gamma(B^0 \rightarrow [\bar{f}]_D K^{*0})}{\Gamma(\overline{B^0} \rightarrow [f]_D \overline{K^{*0}}) + \Gamma(B^0 \rightarrow [\bar{f}]_D K^{*0})}$$
$$= \frac{2kr_S r_D \sin \phi_3 \sin \delta}{R_{ADS}}$$

$$r_S^2 \equiv \frac{\Gamma(B^0 \rightarrow D^0 K^+ \pi^-)}{\Gamma(B^0 \rightarrow \overline{D^0} K^+ \pi^-)}$$
$$r_D^2 \equiv \frac{\Gamma(D^0 \rightarrow f)}{\Gamma(D^0 \rightarrow \bar{f})}$$

k : $B^0 \rightarrow DK\pi$ からの補正 ~ 1

本解析では $f = K^+\pi^-$ を観測し、

$B^0 \rightarrow [K^+\pi^-]_D K^{*0}$ の崩壊分岐比を求める。

(R_{ADS} の分母を求める)

Belle実験

Belle実験

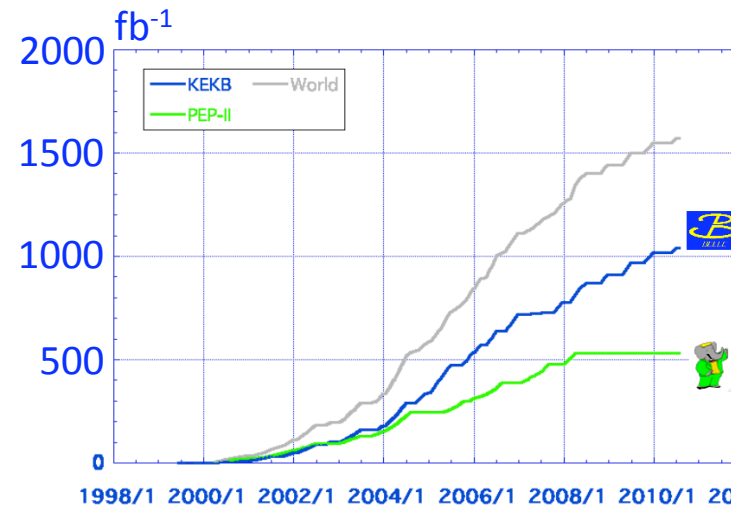
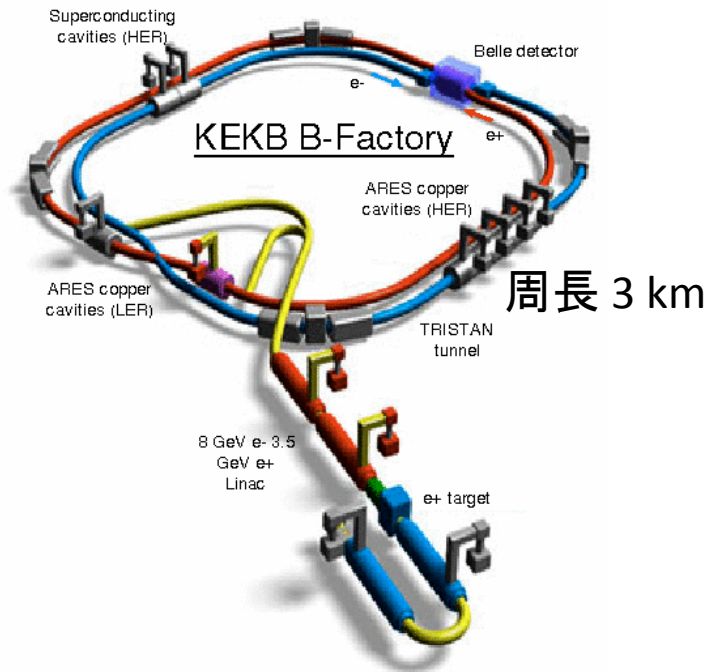
- Belle実験

- e^+e^- 衝突で $Y(4S)$ を生成

$Y(4S) \rightarrow B^+B^- \sim 50\%$
 $\rightarrow B^0\bar{B}^0 \sim 50\%$

- KEKB加速器 : 電子 8.0 GeV、陽電子 3.5 GeV

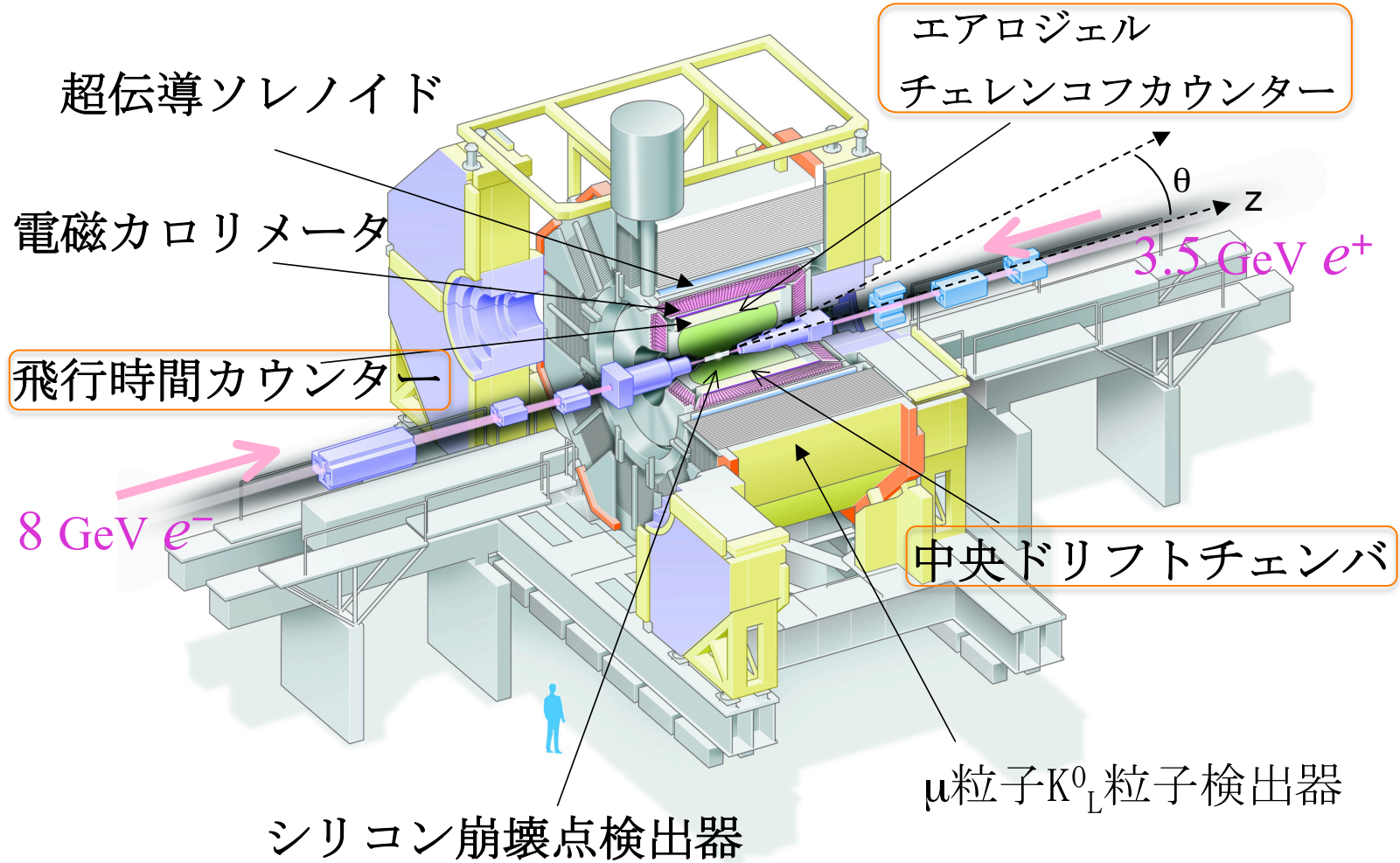
重心エネルギー 10.6 GeVの非対称衝突型加速器



e^+e^- 衝突器として世界最高の積分ルミノシティ

Belle検出器

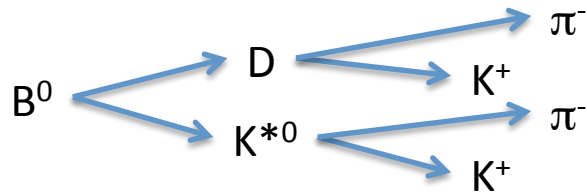
粒子識別で特に重要なもの、
詳細は後述



$B^0 \rightarrow DK^{*0}$ の解析

解析の流れ

本解析のシグナルモード



使用するデータ

- Belle 711 fb^{-1} (772M BBペア相当)
現在Belleで集めたY(4S)全て

- シグナルモンテカルロの解析
 - イベント選択の決定
 - シグナルの検出効率の測定

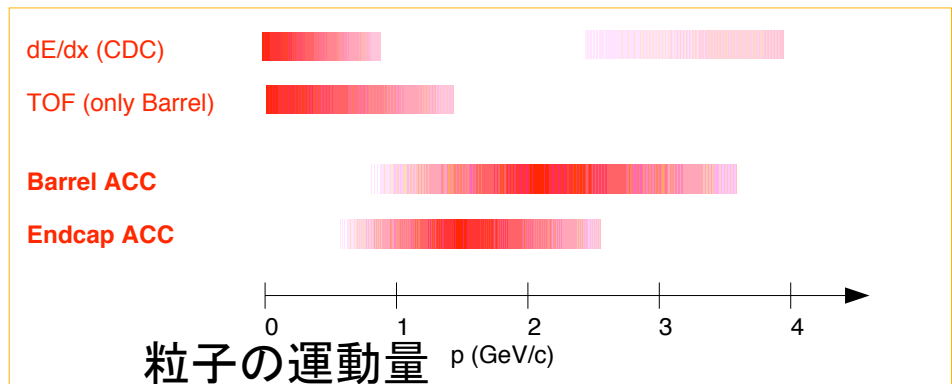
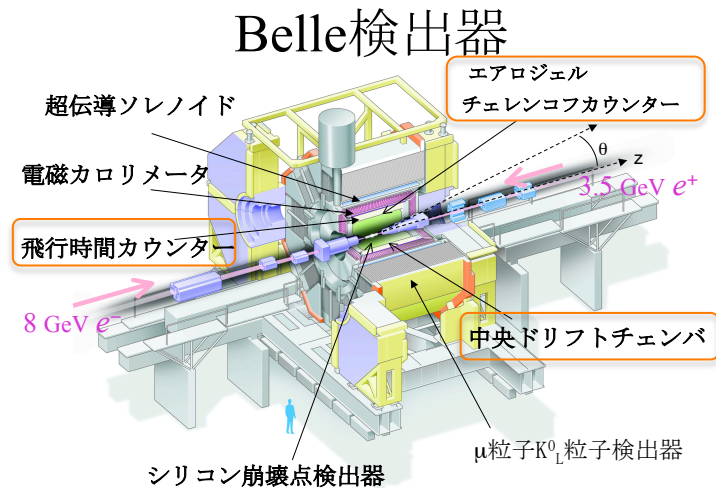
- バックグラウンドの除去
 - $e^+e^- \rightarrow q\bar{q}$ ($q=u,d,s,c$)からのバックグラウンド (KSF, NeuroBayes)
 - B崩壊からのバックグラウンド

- シグナル数の導出
 - データのフィット

粒子識別

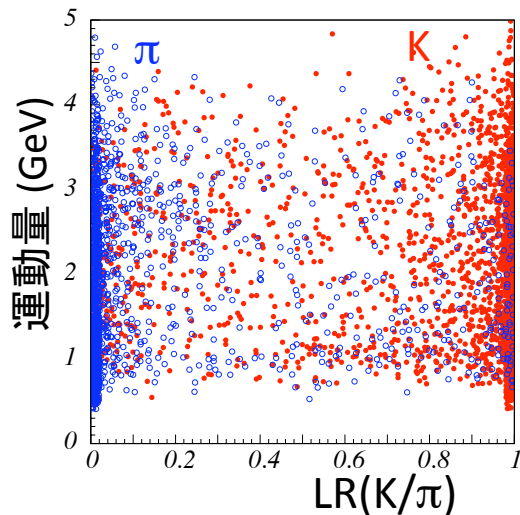
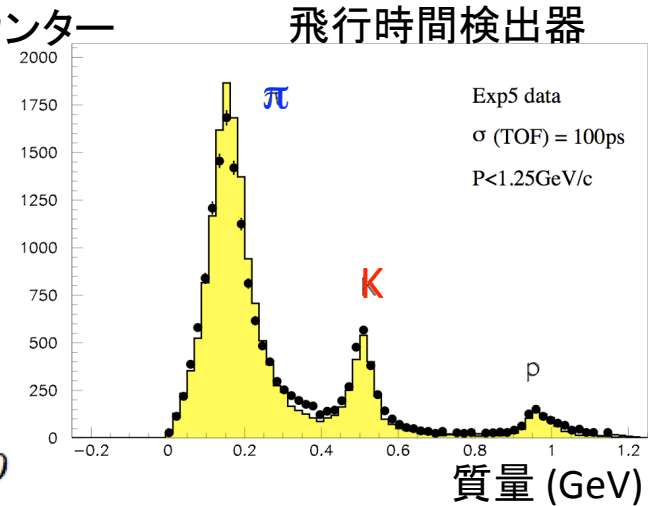
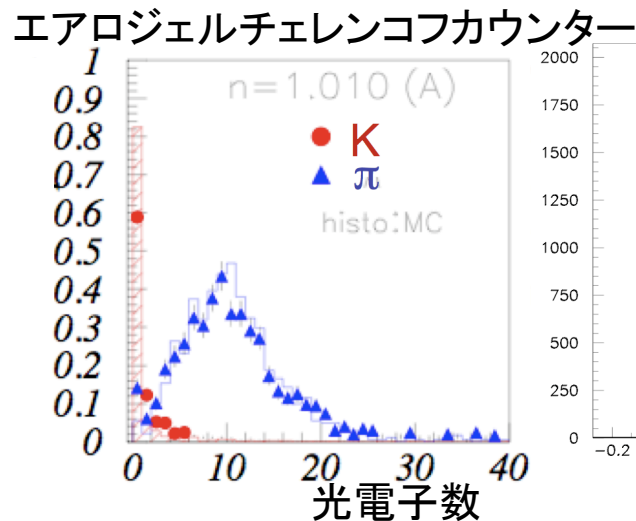
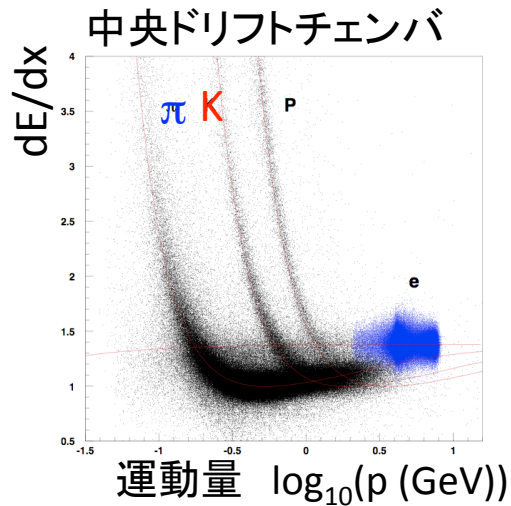
- 本解析では終状態は全て K^\pm, π^\pm
荷電トラックのうち K^\pm, π^\pm 識別が特に重要
 - 中央ドリフトチェンバー : dE/dx
 - チェレンコフカウンター : 光電子数(閾値型)
 - 飛行時間カウンター : 飛行時間

その他
 e^\pm : 軽い、速い
 μ^\pm : 突き抜ける



イベント選択、粒子識別

- それぞれの検出器からトラックの尤度(L(K/ π))を求める



$$L(K, \pi) = L(K, \pi)_{\text{CDC}} * L(K, \pi)_{\text{ACC}} * L(K, \pi)_{\text{TOF}}$$

$$LR(K/\pi) \equiv L(K) / (L(K) + L(\pi))$$

粒子識別の要求

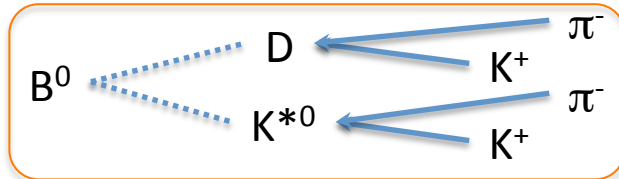
- D⁰に対する要求

$$K^\pm : LR(K/\pi) > 0.4 \quad \pi^\pm : LR(K/\pi) < 0.6$$

- K*⁰に対する要求

$$K^\pm : LR(K/\pi) > 0.7 \quad \pi^\pm : LR(K/\pi) < 0.6$$

イベント選択、再構成 1 (D^0, K^{*0})

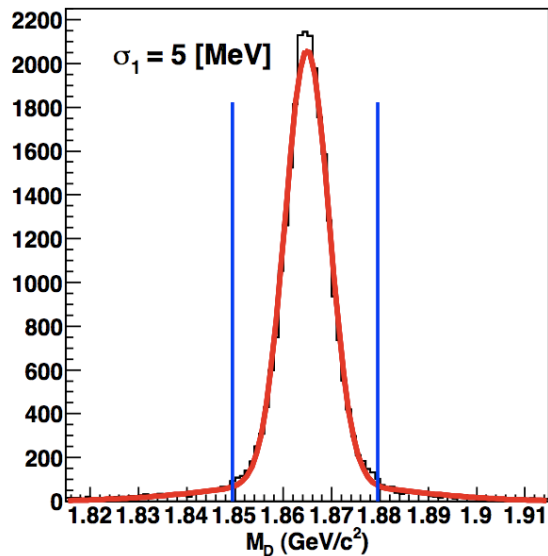


$m_{D^0} = 1.865 \text{ GeV}$
 $m_{K^{*0}} = 0.896 \text{ GeV}$
 $m_{B^0} = 5.280 \text{ GeV}$

• D^0 の再構成

- 電荷の異なる K^\pm, π^\pm より再構成
- $|M_{K\pi} - m_{D^0}| < 0.015 \text{ GeV}$

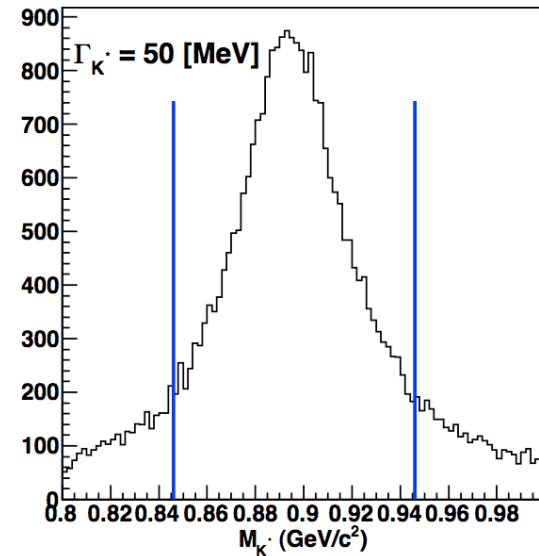
D_{rec}^0 mass 3σ cut



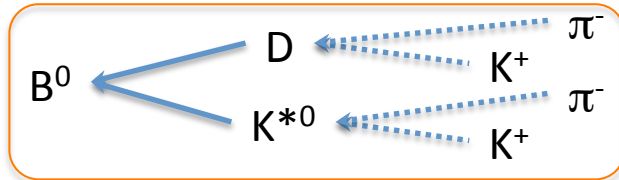
• K^{*0} の再構成

- 電荷の異なる K^\pm, π^\pm より再構成
- $|M_{K\pi} - m_{K^{*0}}| < 0.050 \text{ GeV}$

K_{rec}^{*0} mass 1Γ cut



イベント選択、再構成 2 (B⁰)



$$m_{D^0} = 1.865 \text{ GeV}$$

$$m_{K^{*0}} = 0.896 \text{ GeV}$$

$$m_{B^0} = 5.280 \text{ GeV}$$

• B⁰の再構成

– 二つの運動学的変数を利用

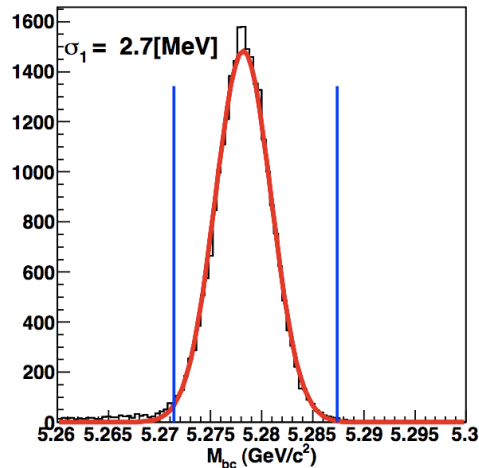
$$M_{bc} \equiv \sqrt{E_{\text{beam}}^2 - (\vec{p}_{D^0} + \vec{p}_{K^{*0}})^2}$$

再構成したB⁰の不変質量

$$m_B = \sqrt{E_B^2 - (\vec{p}_{D^0} + \vec{p}_{K^{*0}})^2}$$

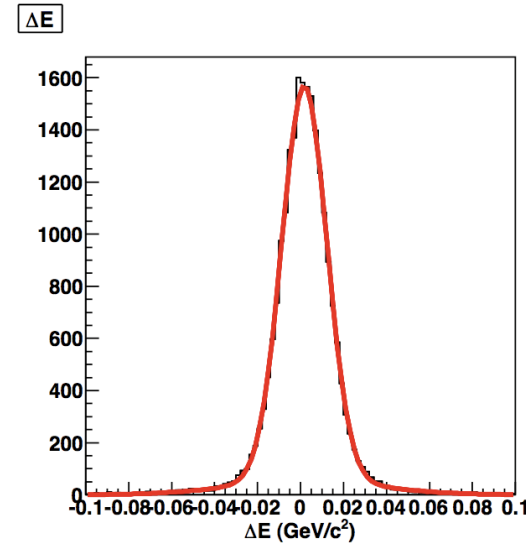
運動量の保存に対応

$$M_{bc} \text{ mass } 3\sigma \text{ cut } \quad |M_{bc} - m_{B^0}| < 0.008 \text{ GeV}$$



$$\Delta E \equiv E_{D^0} + E_{K^{*0}} - E_{\text{beam}}$$

エネルギーの保存に対応
シグナルの導出に用いる

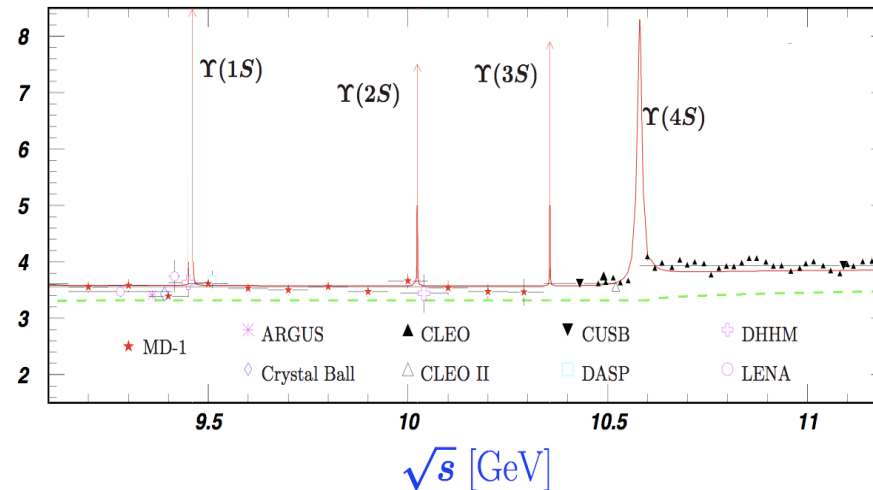


B⁰ → DK^{*0}の解析

バックグラウンド

- 大きく分けて2種類のバックグラウンドがある
 - B以外からの崩壊 (これをコンテニウムバックグラウンドと呼ぶ)

$$e^+e^- \rightarrow q\bar{q} \quad (q = u, d, s, c)$$



– B崩壊からのバックグラウンド

- シグナルと同じ終状態
- K/ π 誤識別あり
- 未検出粒子あり
- 片側のBからトラックを拾っている
- 等々

$$B^0 \rightarrow D^* K^+, D^- \pi^+ \dots$$

$$B^0 \rightarrow \bar{D}^0 \rho^0 \dots$$

$$B^0 \rightarrow \bar{D}^{*0} K^{*0} \dots$$

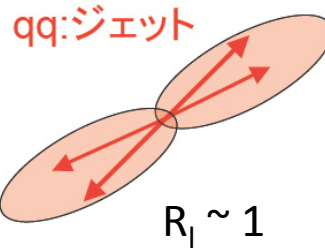
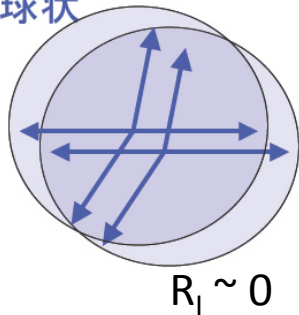
$$B^+ \rightarrow \bar{D}^{*0} K^+ \dots$$

コンテニウムバックグラウンドの抑制 (KSFW, $\cos\theta_B$)

- イベントの形状からシグナルとコンテニウムバックグラウンドの尤度比(LR_{KSFW})を求める。

Belleの解析では一般的に使われる手法

B:球状



$$R_l = \frac{\sum_{i,j} |p_i||p_j|P_l(\cos\theta_{i,j})}{\sum_{i,j} |p_i||p_j|}$$

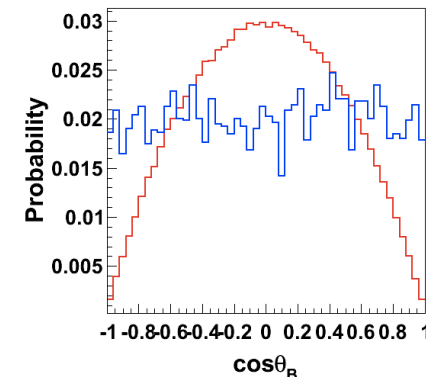
$p_{i,j}$: i,j 番目の粒子の運動量

P_l : ルジャンドル関数

$\theta_{i,j}$: i 番目 j 番目の粒子の運動量の成す角

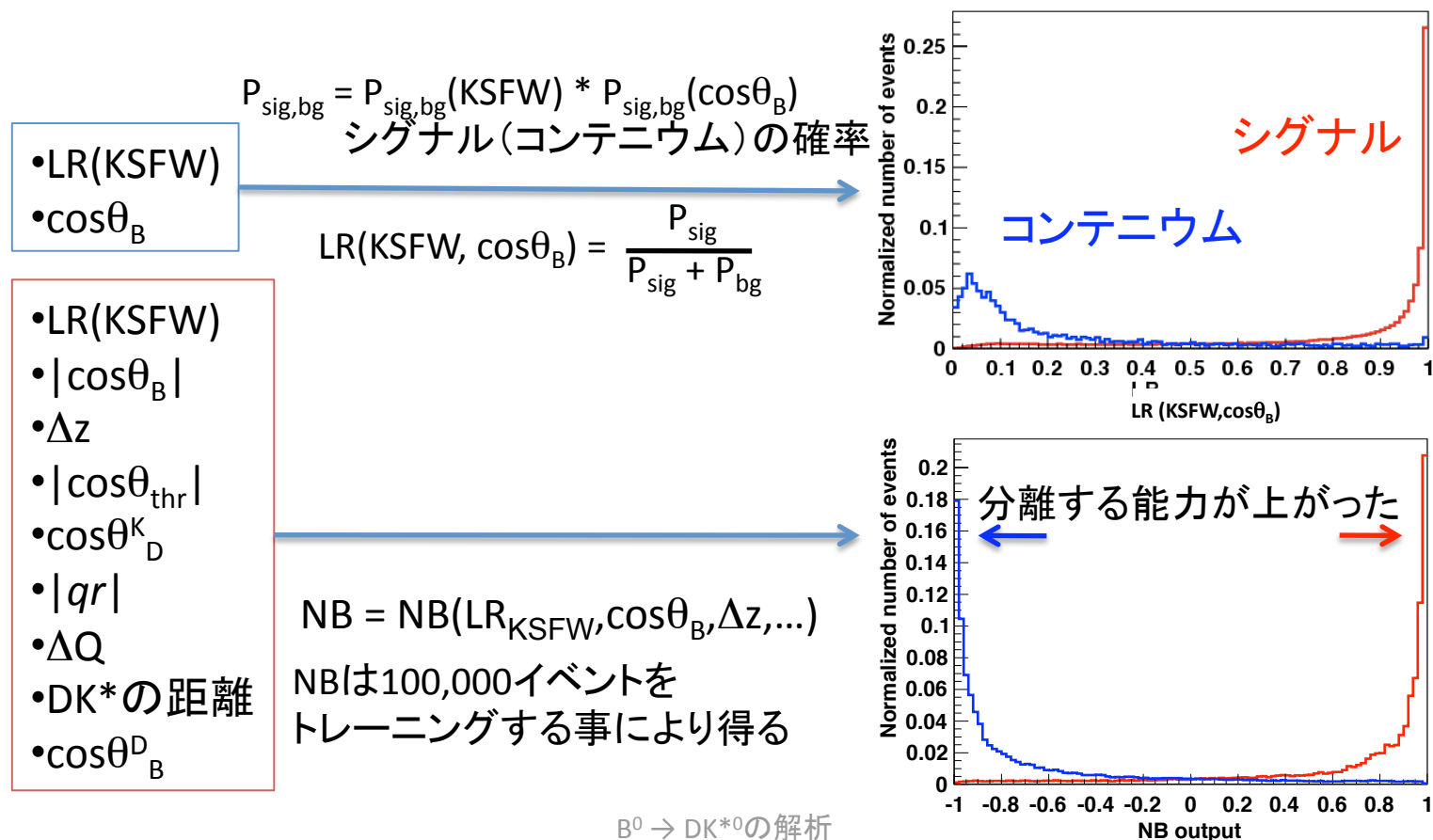
- e^+e^- 重心系のBの角度分布($\cos\theta_B$)も使う。
 - Bイベントは軌道角運動量1となる

シグナル : $1 - \cos^2\theta$
コンテニウム : ほぼ一様

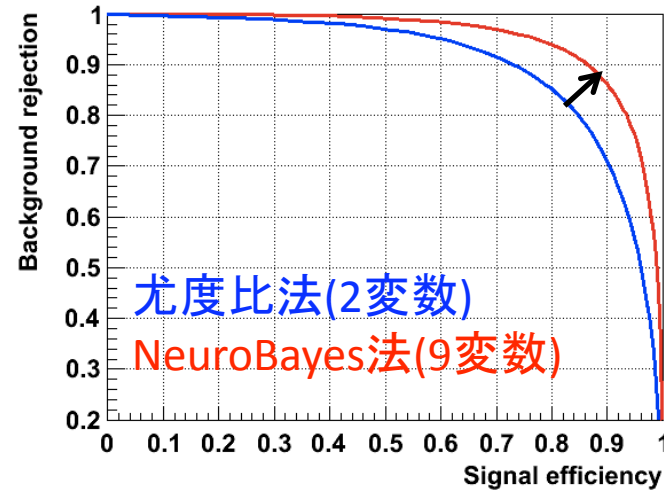


コンテニウムバックグラウンドの抑制 (NeuroBayes) 1

- コンテニウムバックグラウンド抑制により多くの変数を用いる。
ニューラルネット利用した。(NeuroBayesと呼ばれるパッケージ)



コンテニウムバックグラウンドの抑制 (NeuroBayes) 2



バックグラウンド 除去率 (%)	シグナル保持率 (%)		シグナル 保持率比
	尤度比法 (2変数)	NeuroBayes法 (9変数)	
99	27.1	52.0	1.92
95	60.5	77.4	1.28
90	73.1	86.4	1.18
80	84.8	93.4	1.10

誤差はそれぞれ ~ %程度。

NBのアウトプットに
緩いカット(NB > -0.6)を課し、
 ΔE , NBの2次元フィットして
シグナルを導出。

Bイベントからのバックグラウンド 1

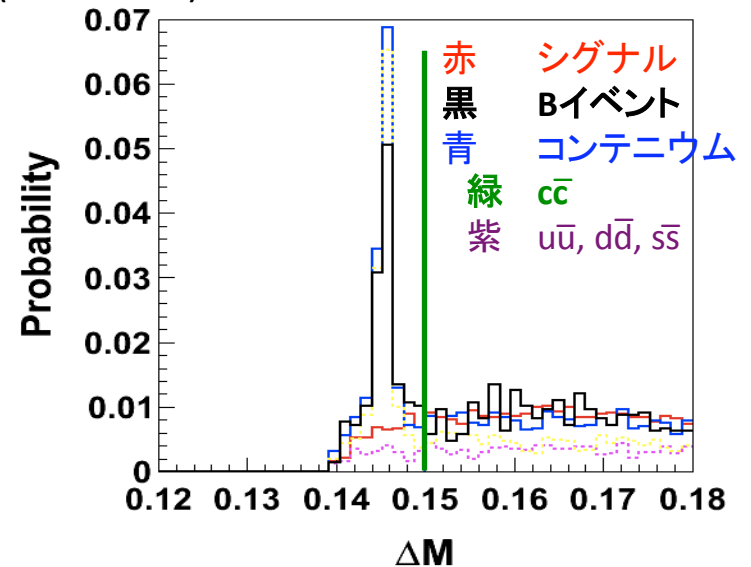
- D*イベント

$D^{*+} \rightarrow D^0\pi^+$ 崩壊のD⁰をとらえて
シグナルを再構成してしまう
 $\Delta M < 0.15$ GeV のイベントを除去
- $B^0 \rightarrow D^{*-}K^+$ $(2.14 \pm 0.16) * 10^{-4}$
 $D^{*-} \rightarrow \bar{D}^0\pi^-$ $(6.7 \pm 0.5) \%$

シグナルと同じ終状態
 使用したデータ量(772M BBペア)に対し
 6.7 ± 0.2 イベントの寄与
 6.7イベントをシグナルから差し引き、
 0.2イベントは系統誤差に加える
- $B^0 \rightarrow \bar{D}^0\rho^0$
 $\rho^0 \rightarrow \pi^+\pi^-$

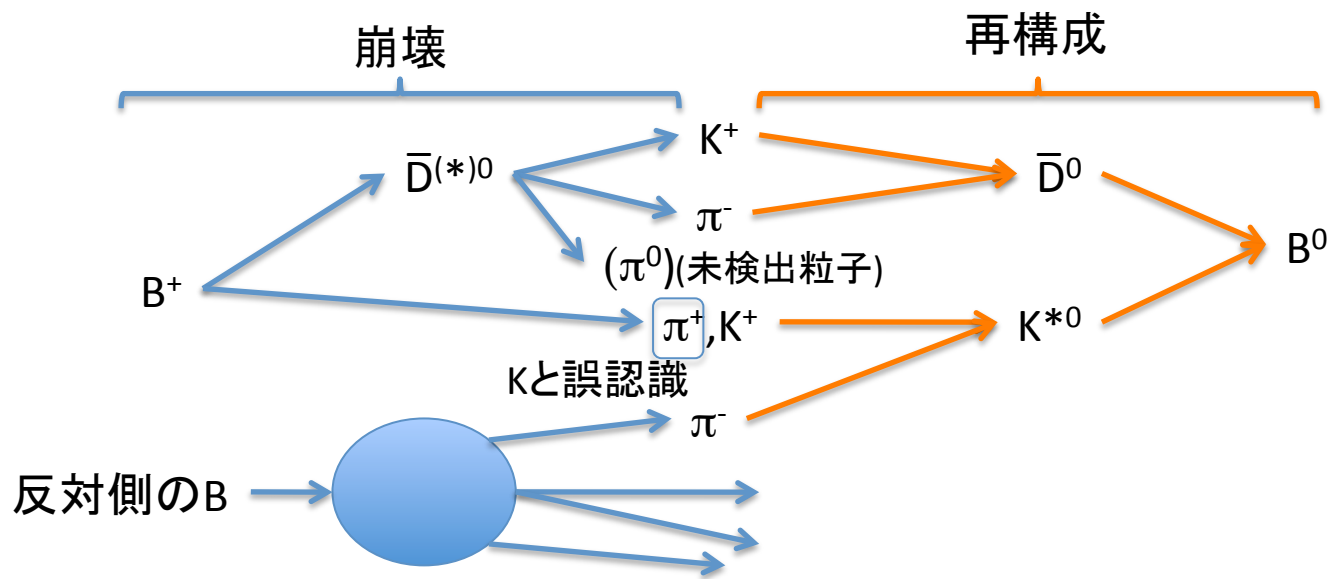
π 一つKと誤認識を含み、 $\Delta E \sim 0.05$ GeVにピーク
 モンテカルロを生成し、フィットに加える

$\Delta M : M_{D^{*\pm}} - m_{D^0}$
 $\Delta M \sim m_{\pi}$ (0.140 GeV)にピーク



Bイベントからのバックグラウンド 2

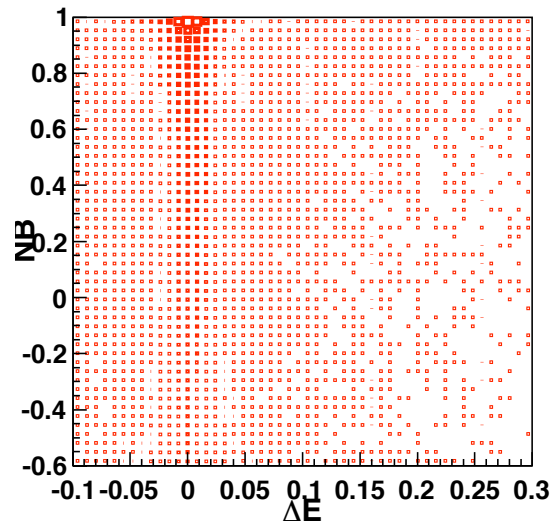
- $B^+ \rightarrow \bar{D}^0 \pi^+$
- $B^+ \rightarrow \bar{D}^{*0} \pi^+$
- $B^+ \rightarrow \bar{D}^0 K^+$
- $B^+ \rightarrow \bar{D}^{*0} K^+$



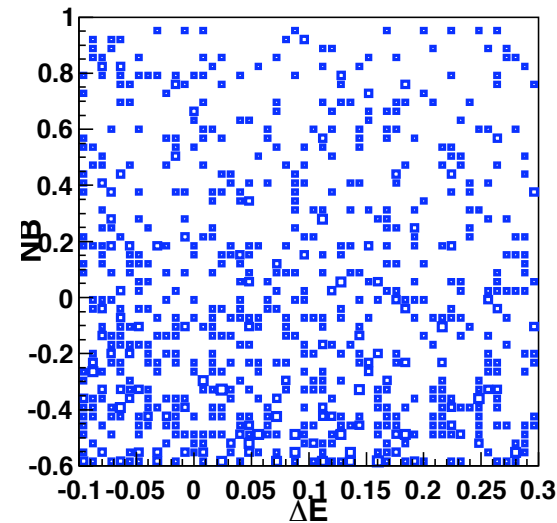
- モンテカルロを生成し、フィットに加える

シグナルの導出

- シグナル数の導出に $\Delta E, NB$ の2次元をフィットして行う



シグナル - 1.9 %

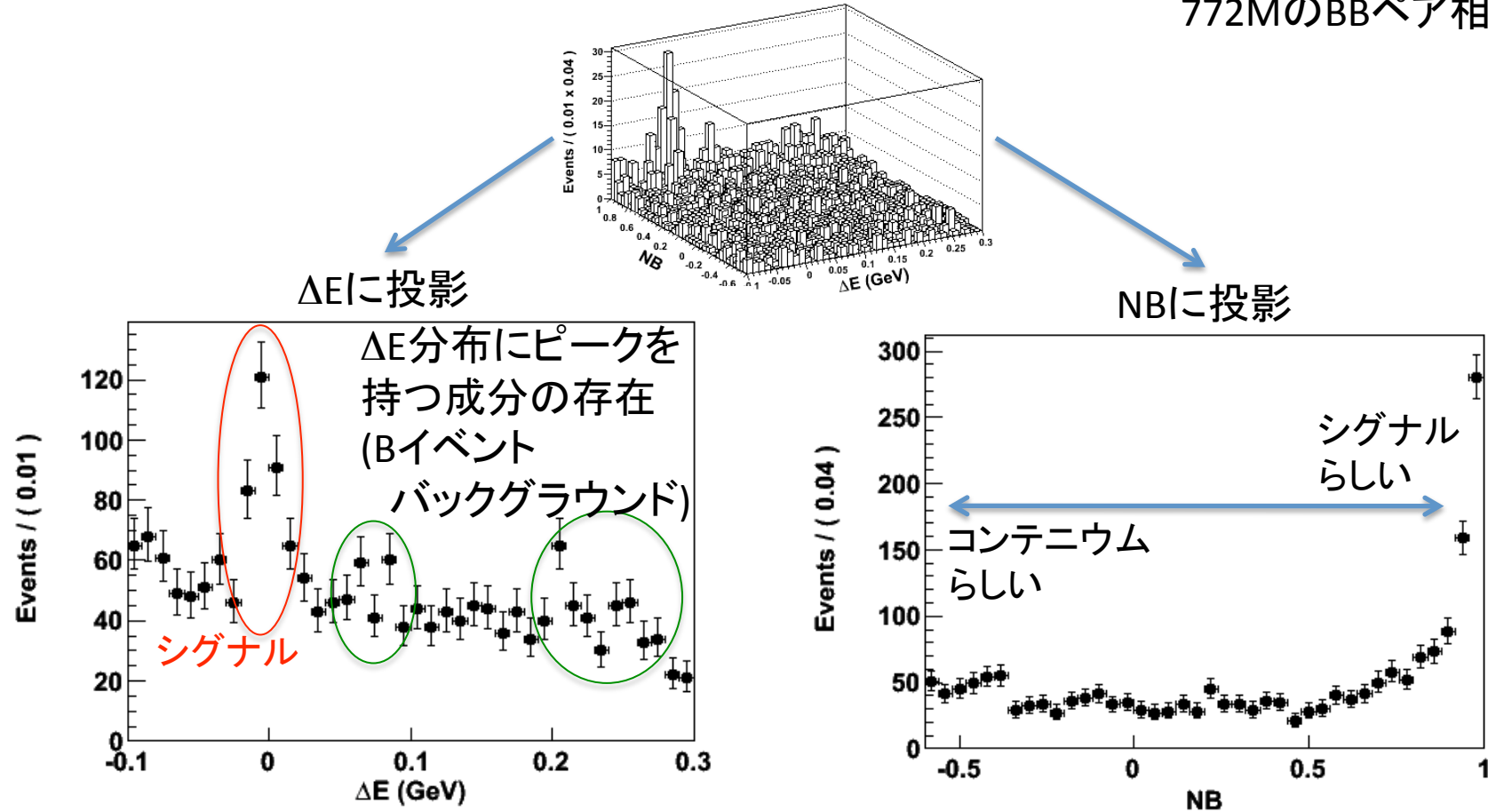


コンテニウム - 1.5 %

- $\Delta E, NB$ に相関がほぼ無いため、フィットする確率密度関数は1次元のものを掛け合わせて作成する

データの分布

772MのBBペア相当



- この分布をフィットする事でシグナル数を導出する

確率密度関数

- ΔE の確率密度関数

- シグナル

- シグナルモンテカルロより
求めた二つのガウシアン之和

- Bイベント

- $\bar{D}^0\rho^0, \bar{D}^0\pi^+, \bar{D}^0K^+, \bar{D}^{*0}\pi^+, \bar{D}^{*0}K^+$
モンテカルロ生成し、それぞれ
対応する確率密度関数を得る、
イベント数はPDGから算出し、
形状、大きさを固定

- その他
指数関数

- コンテニウム

- 直線

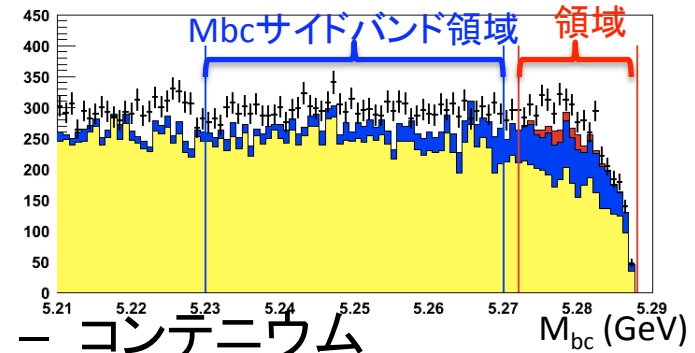
- NBの確率密度関数

- シグナル

- シグナルモンテカルロ

- Bイベント

- モンテカルロ



- コンテニウム

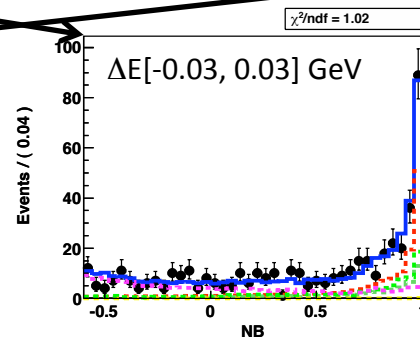
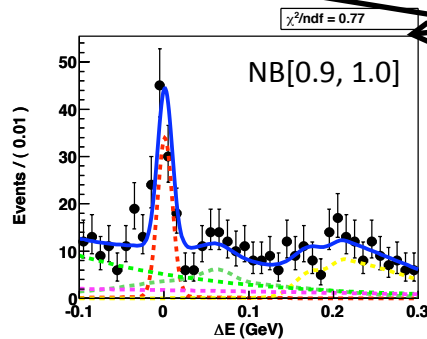
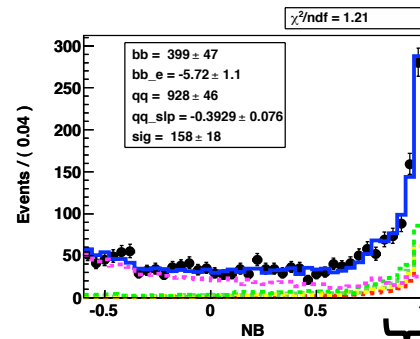
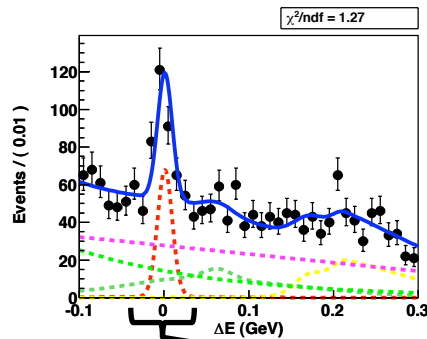
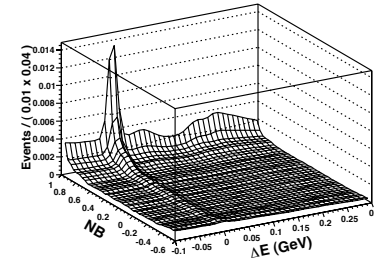
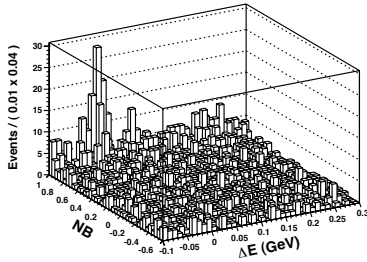
- M_{bc} サイドバンド (M_{bc} [5.23, 5.27] GeV) から B イベントの寄与を差し引いたもの

$B^0 \rightarrow [K^+\pi^-]_D K^{*0}$ シグナルの導出

772MのBBペア相当

データ

確率密度関数



- 赤い破線 : シグナル
- 明緑色破線 : Bイベント
- 緑色破線 : $\bar{D}^0 \rho^0 \bar{D}^{*0} \pi^+ \bar{D}^{*0} K^+$
- 黄色破線 : $\bar{D}^0 \pi^+ \bar{D}^0 K^+$
- 紫色破線 : コンテニウム
- 青い実線 : 合計
- 誤差棒付き点 : データ

得られたシグナル数 = $158 \pm 18 - 6.7$

崩壊分岐比 = $(3.85 \pm 0.47) \cdot 10^{-5}$

PDG $\text{Br}(B^0 \rightarrow \bar{D}^0 K^{*0}) = (4.2 \pm 0.6) \cdot 10^{-5}$

標準偏差 -0.5σ

PDGと無矛盾なシグナルが得た。

誤差を小さく抑える事に成功

結果

系統誤差

誤差の起源	(%)
B \bar{B} ペアの数	± 1.4
トラックの検出効率 1トラック当たり $\pm 1.0\%$	± 2.0
シグナルの検出効率	± 0.2
崩壊分岐比 $\text{Br}(D^0 \rightarrow K\pi)$ の不確定	± 1.3
$[D^0\pi^-]_{D^*}K^+$ イベントの寄与	± 0.1
フィットバイアス 1,000回の疑似イベントのフィットより	0.0
合計	± 2.8

- $\text{Br}(B^0 \rightarrow [K^+\pi^-]DK^{*0}) \sim \text{Br}(B^0 \rightarrow \bar{D}^0K^{*0})$
 $= (3.85 \pm 0.47(\text{統計誤差}) \pm 0.11(\text{系統誤差}))$

測定結果

	Br($B^0 \rightarrow D^0 K^{*0}$)	(* 10^{-5})
本解析	$3.85 \pm 0.47 \pm 0.11$	
前回のBelle実験の解析(85M $B\bar{B}$) PRL 90, 141802 (2003)	$4.8^{+1.1}_{-1.0} \pm 0.5$	
PDG	4.2 ± 0.6	

- 本解析の結果は、統計、系統誤差共に小さくなっている。
- 統計誤差
 - Belle実験全体でより多くのB中間子を生成できた
 - NeuroBayes法でシグナルの保持率を高く維持したままバックグラウンドと分離出が可能であった
- 系統誤差
 - 前回のBelleの結果と比較し、より一層のBイベントのバックグラウンドの研究によるものである。

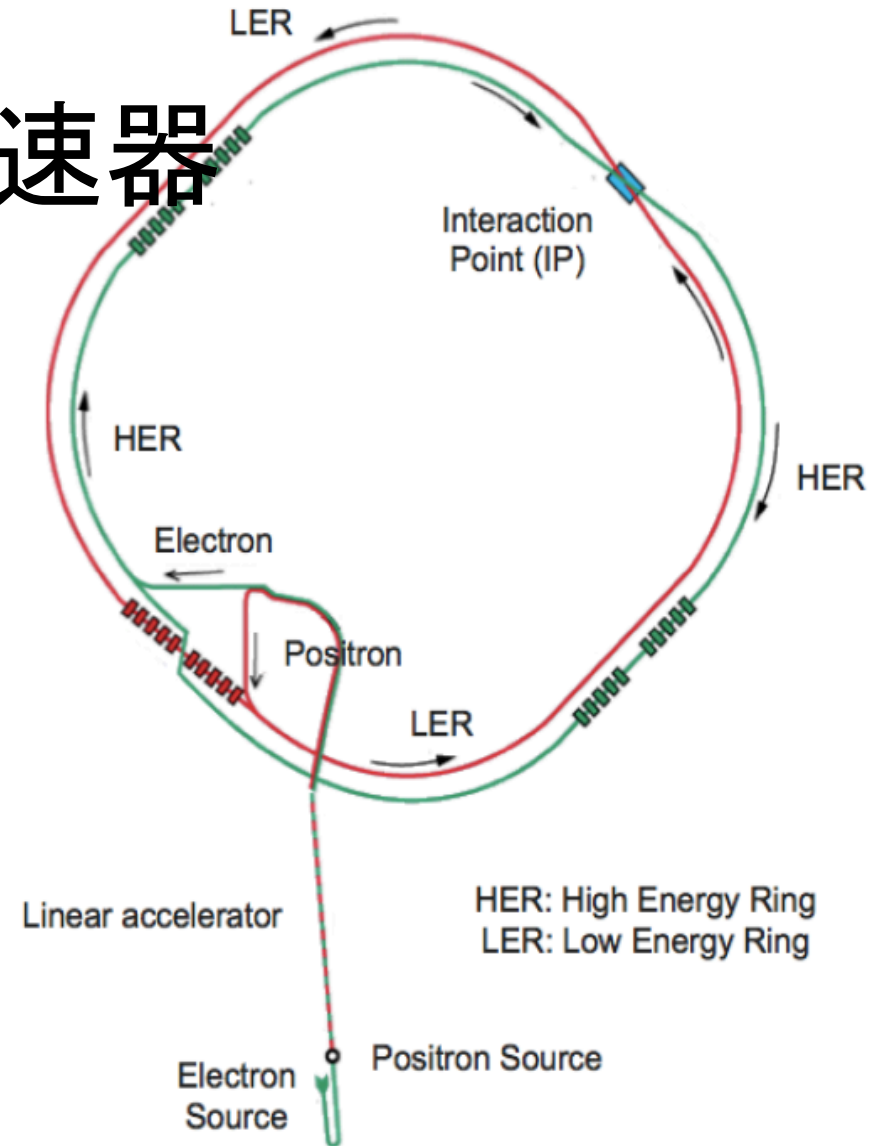
まとめ

- ϕ_3 は標準理論の検証の為に重要なパラメータの一つ
- 本解析モード $B^0 \rightarrow DK^{*0}$ 崩壊は ϕ_3 測定に有用
 - より一層の研究が求められる。
- $B^0 \rightarrow \bar{D}^0 K^{*0}$ の崩壊分岐比を求めた
$$\text{Br}(B^0 \rightarrow \bar{D}^0 K^{*0}) = (3.85 \pm 0.47 \pm 0.11) * 10^{-5}$$
 - 誤差を小さく抑える事が出来た

BACK UP

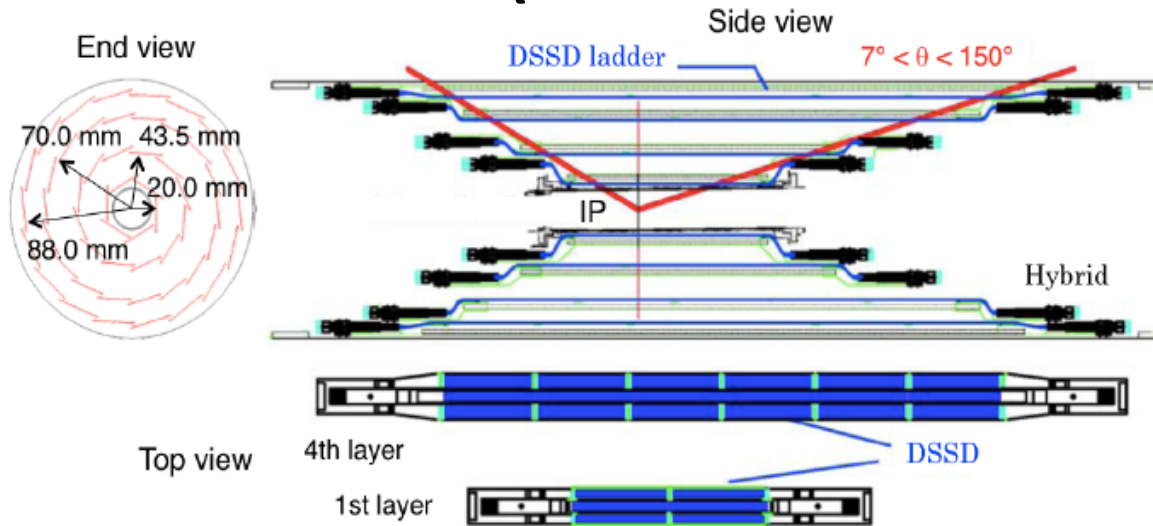
KEKB加速器

- 電子源: 熱電子銃
- 陽電子源:
電子をタングステンに入射し抽出
- 電子8.0 GeV / 陽子3.5 GeV ($\beta\gamma \sim 0.4$)
- 入射器: 2004年から連続入射法
- 電流: 双方1 A程度
- バンチ数: 双方1000程度
- バンチ当たり粒子数: 10^{10}
- ビーム: $O(1) \mu\text{m} \times O(100) \mu\text{m}$
- 衝突点での交差角: 22 mrad
- 2007年から「クラブ衝突」導入



¹The luminosity is described as $\mathcal{L} = N_+ N_- f / 4\pi \sigma_x^* \sigma_y^*$, where N_{\pm} is the number of particles e^{\pm} per bunch, f is the frequency of collision, and $\sigma_{x,y}^*$ is the beam size at IP in x or y direction.

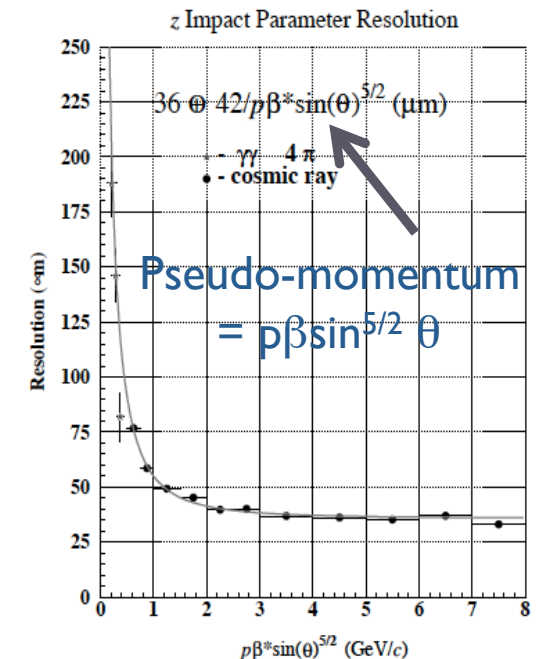
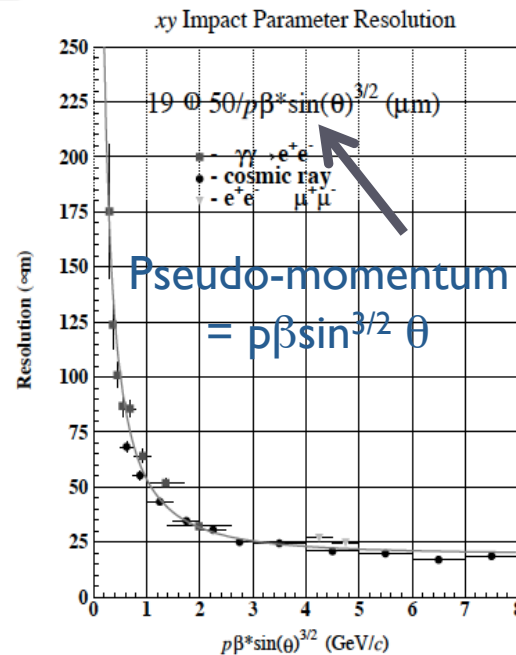
SVD (Silicon Vertex Detector)



DSSD = double-sided Si strip
 Chip size: 57.5 x 33.5 mm²
 Strip pitch: 25 (p)/50 (n) μm

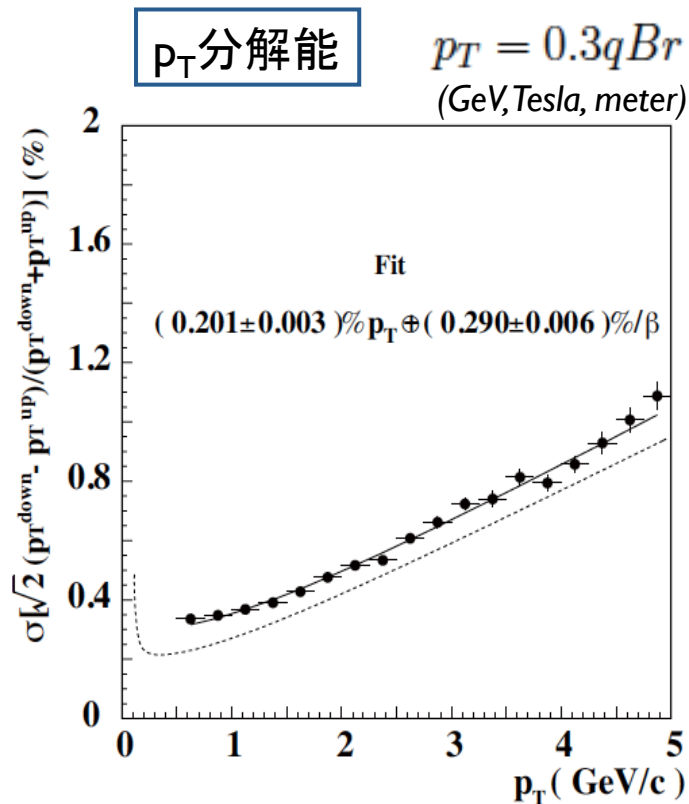
B中間子観測における
 典型的分解能: $\sigma_{\Delta z} \sim 80 \mu\text{m}$.

読み出し: VAITA集積回路を用いる。
 チップの放射線耐性は20 Mrad。
 (1 rad = 0.01 J/kg)

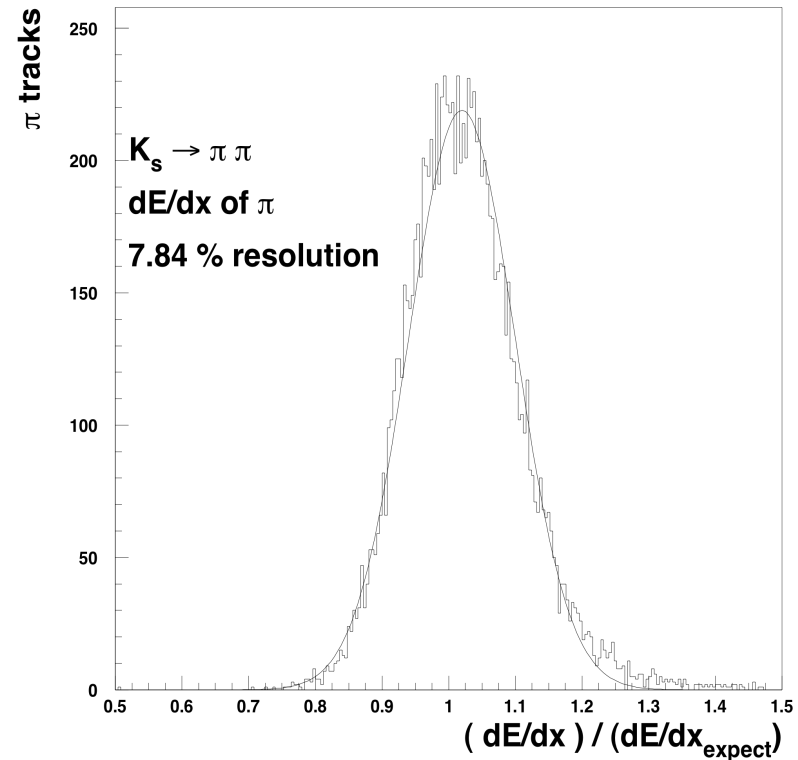


CDC (Central Drift Chamber)

- Anode: 50 layers including 18 stereo wires
(30 μ m-diameter gold-plated tungsten)
- r from beam axis = 8.3-86.3 cm
- -77 < z < 160 cm ($17^\circ < \theta < 150^\circ$)



dE/dx分解能の例

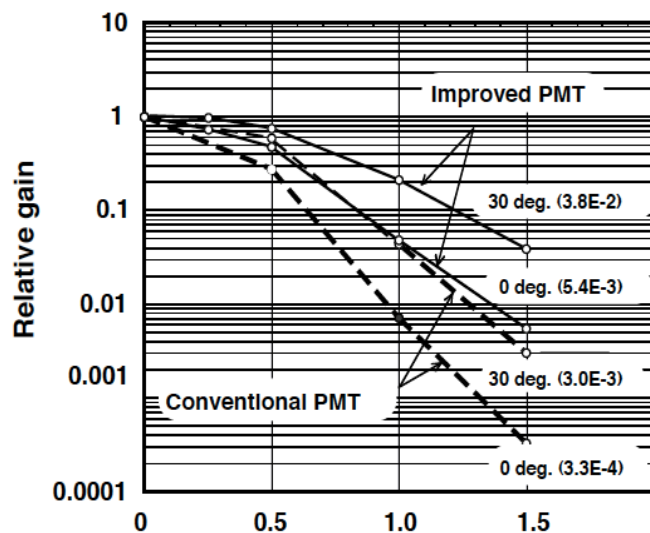
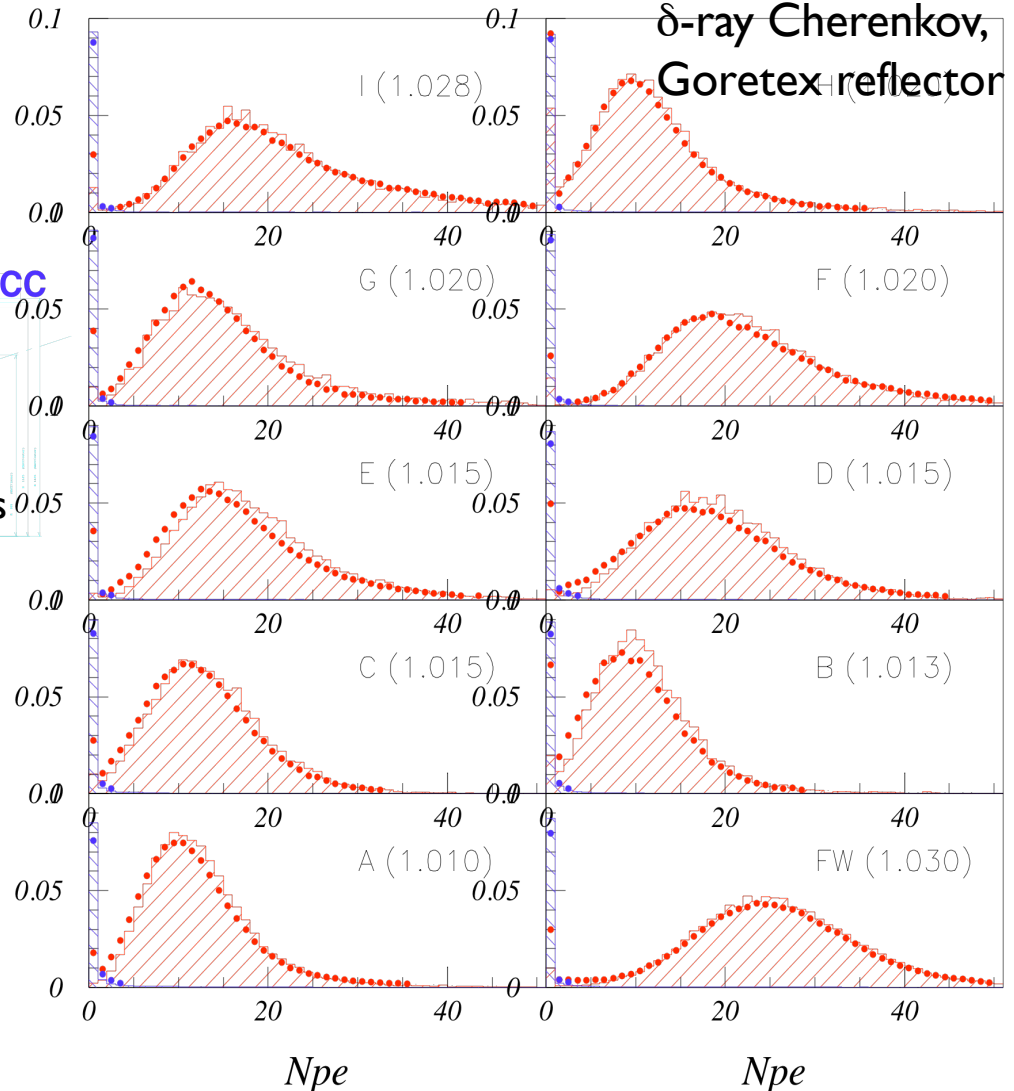
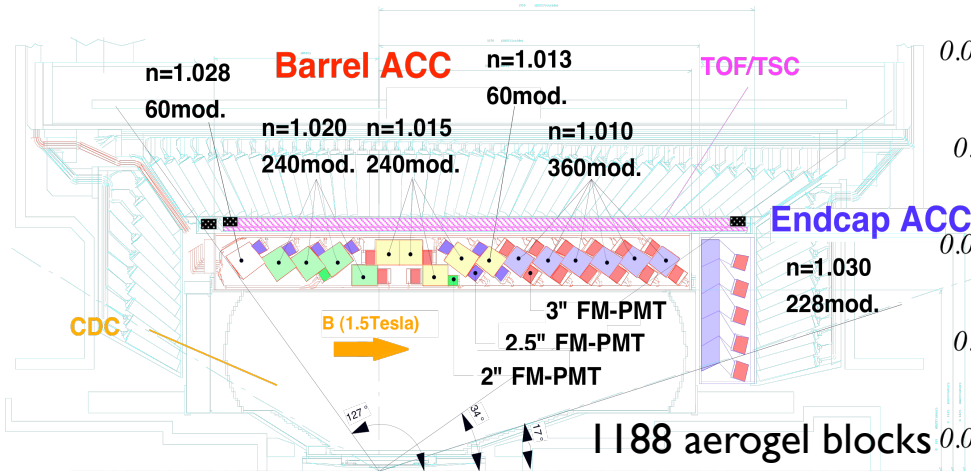


物質密度を上げれば分解能は良くなる。
Belleでは、多重クーロン散乱を
避けるためにHe+C₂H₆を利用。
(Gas gain = 10⁵ @ 3 kV)

ACC (Aerogel Cherenkov Counter)

$$n > \frac{1}{\beta} = \sqrt{1 + \left(\frac{m}{p}\right)^2}$$

K/π separation from 1.2 GeV to 3.5 GeV



Gain $\sim 10^8$ @0T

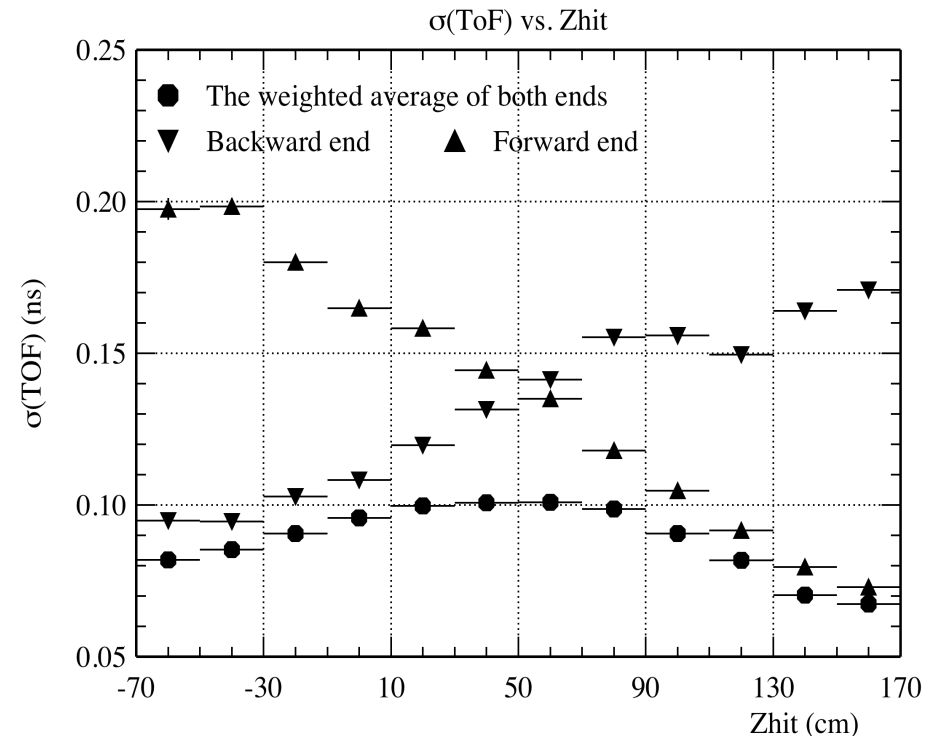
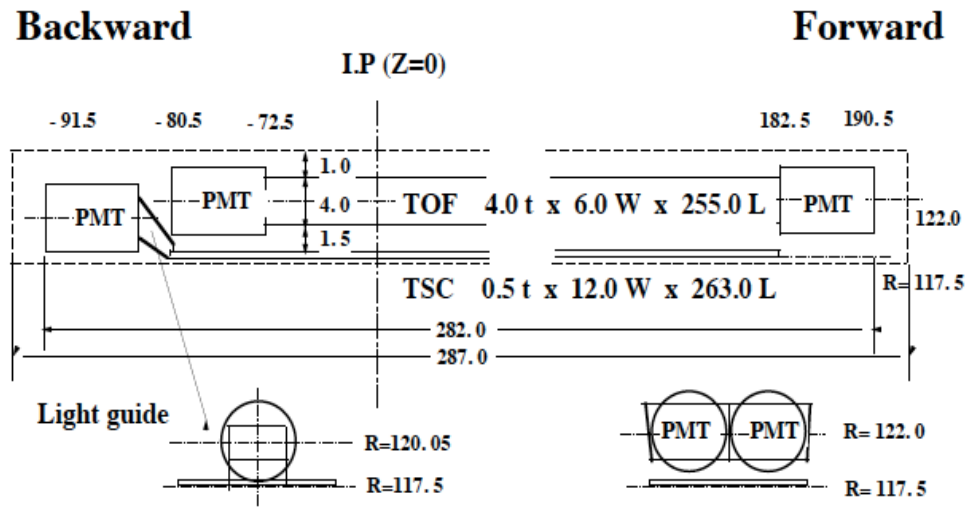
B (Tesla)

(Poisson distribution smeared by FM PMTs.)

TOF (Time-of-Flight Counter)

- r from beam axis = 120 cm
- Length = 3-m long, $N_{\text{scintillators}} = 128$
- $\sigma_T = 100$ psec
- K/ π separation up to 1.2 GeV

飛行時間分解能

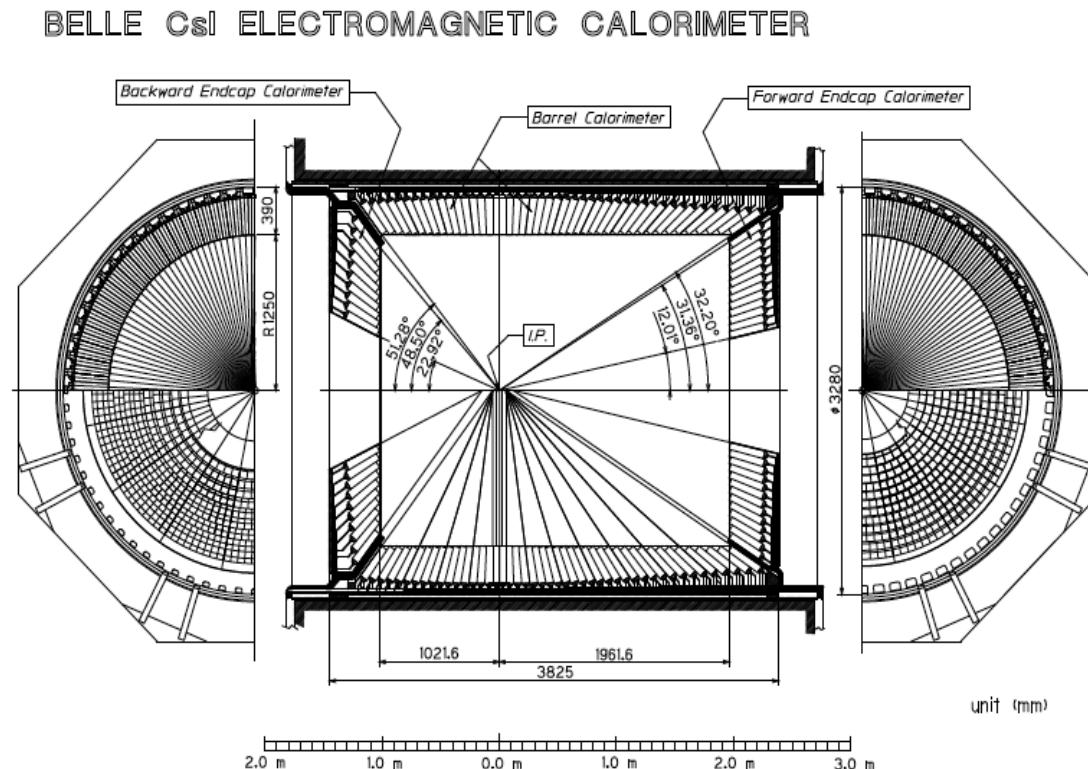


$$t = \frac{l}{c\beta} = \frac{l}{c} \sqrt{1 + \left(\frac{m}{p}\right)^2}$$

飛行距離、シンチレーションの早さ、
光量、PMT性能などが大切な要素。

ECL (Electromagnetic Calorimeter)

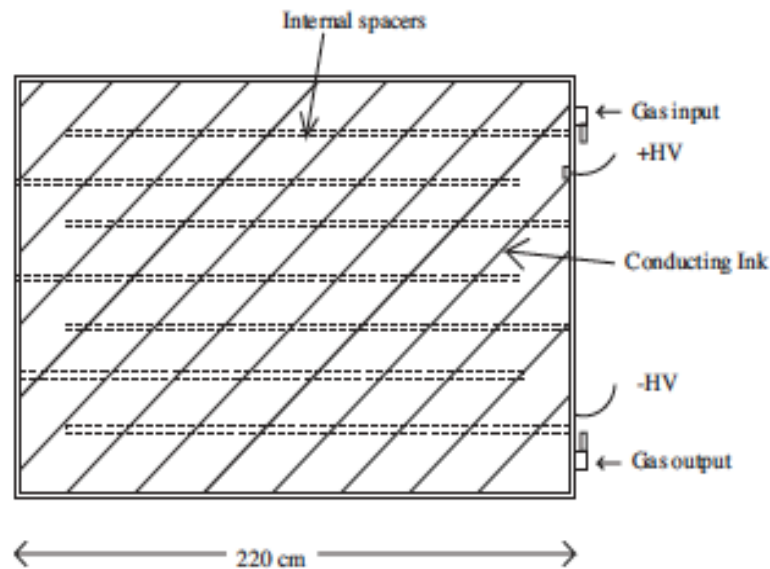
- PINフォトダイオードを用い、電磁シャワーを検出。
- エネルギー分解能は、 $\sim 1.3\%/VE$ 。位置分解能は $\sim 0.5 \text{ cm}/VE$ 。(E in GeV)
(回路ノイズ、シャワーの漏れ、較正誤差などが効いてくる。)



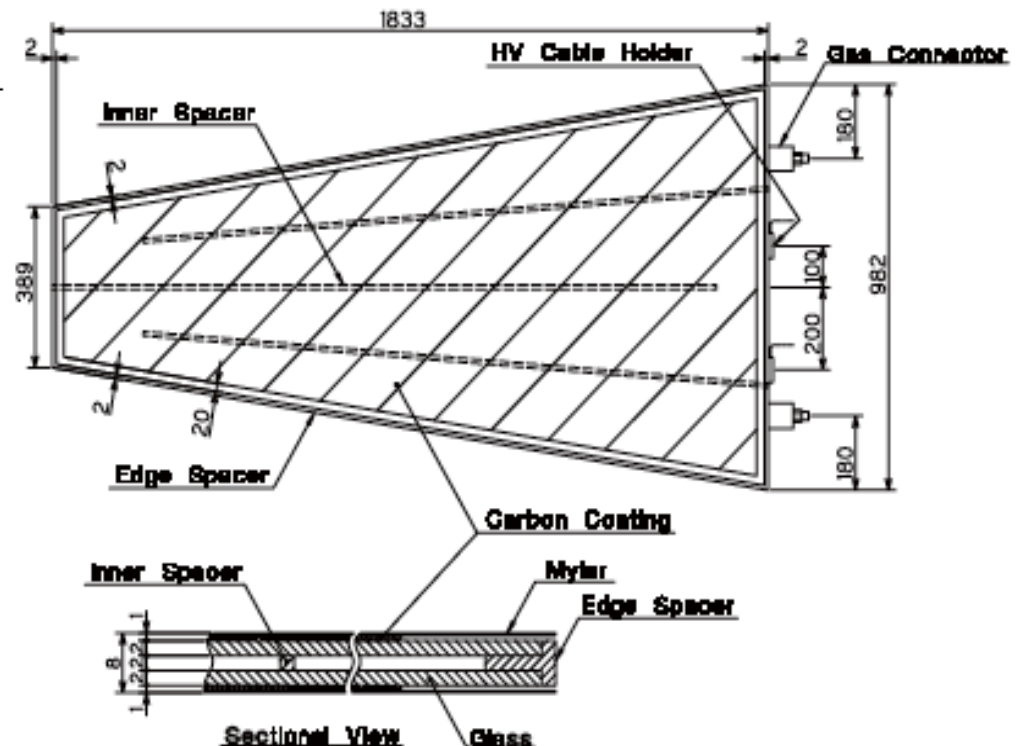
KLM (K_L /Muon Detector)

- 鉄とRPC (Registive Plate Chamber)のサンドイッチ構造(14層)。
- K_L (シャワーを発生)とMuon(長い飛跡)の検出を行う。

Gas	Symbol	Mol. weight	Density (g/l)
Argon	Ar	39.95	1.784 (0°C, 1atm)
Butane-silver	C ₄ H ₁₀	58.12	2.6 (0°C, 1atm)
HFC-134a	CH ₂ FCF ₃	102.0	4.5



(a) Barrel RPC.



(b) End-cap RPC.

KSFW

- Fox-Wolfram (FW) moment ($P_l = l$ -th Legendre polynomial):

$$H_l \equiv \sum_{i,j} |\vec{p}_i| |\vec{p}_j| P_l(\cos \theta_{ij}),$$

- Fisher discriminant of Super FW (SFW):

$$\text{SFW} \equiv \sum_{l=2,4} \alpha_l \left(\frac{H_l^{\text{so}}}{H_0^{\text{so}}} \right) + \sum_{l=1}^4 \beta_l \left(\frac{H_l^{\text{oo}}}{H_0^{\text{oo}}} \right)$$

Separate signal B
and the other B.

- Kakuno-SFW:

$$\text{KSFW} \equiv \sum_{l=0}^4 R_l^{\text{so}} + \sum_{l=0}^4 R_l^{\text{oo}} + \gamma \sum_{n=1}^{N_t} |p_{t,n}|,$$

Missing momentum,
Charges of tracks, ...
Fisher coefficients are
determined for seven
missing mass regions.

Flavor tagging

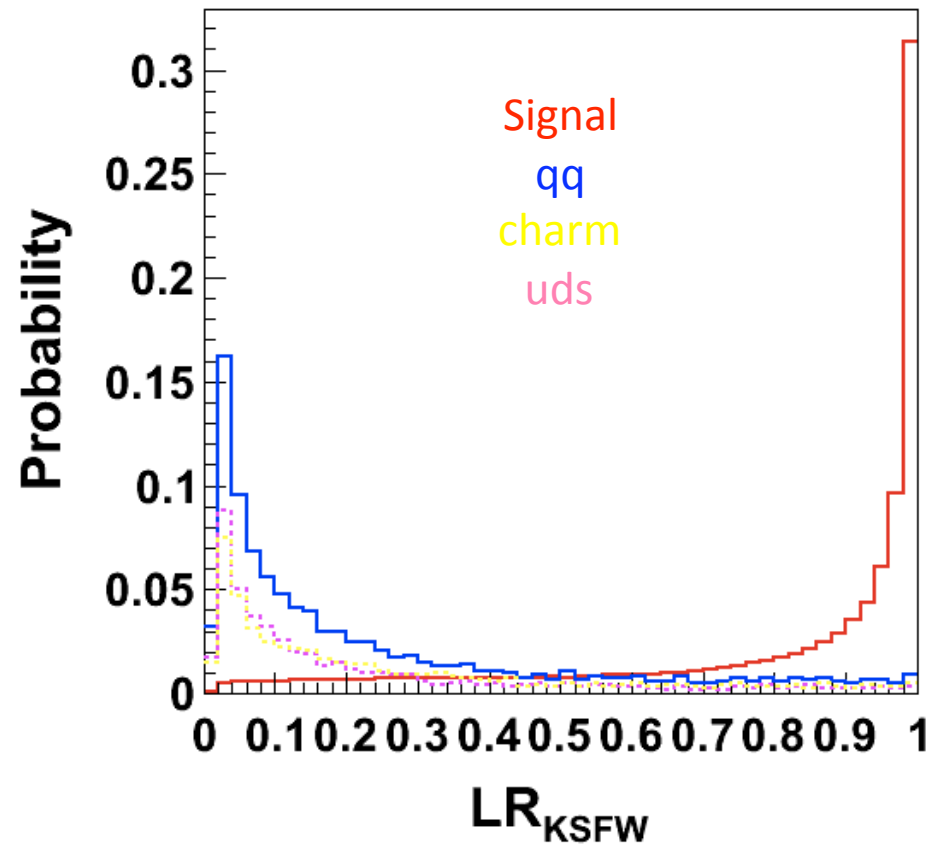
- B-flavor taggingは、下記の情報を用いて行う。

- (1) high-momentum leptons from $B^0 \rightarrow X\ell^+\nu$ decays,
- (2) kaons, since the majority of them originate from $B^0 \rightarrow K^+X$ decays through the cascade transition $\bar{b} \rightarrow \bar{c} \rightarrow \bar{s}$,
- (3) intermediate momentum leptons from $\bar{b} \rightarrow \bar{c} \rightarrow \bar{s}\ell^-\bar{\nu}$ decays, 事象ごとに、(1)から(2)に関連した約50の変数を得て、多次元Likelihood法を用いる。
- (4) high momentum pions coming from $B^0 \rightarrow D^{(*)}\pi^+X$ decays,
- (5) slow pions from $B^0 \rightarrow D^{*-}X, D^{*-} \rightarrow \bar{D}^0\pi^-$ decays, and Taggingの精度 r_{tag} は、qq背景事象分離に用いる。
- (6) $\bar{\Lambda}$ baryons from the cascade decay $\bar{b} \rightarrow \bar{c} \rightarrow \bar{s}$.

NeuroBayes Inputs

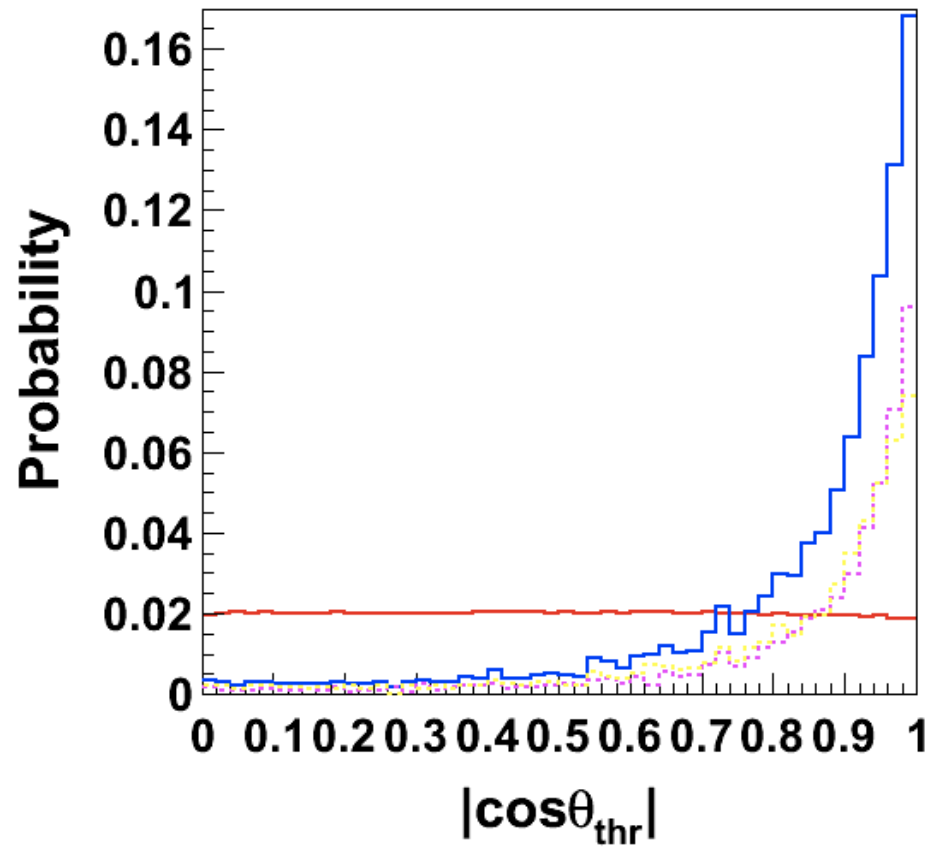
$$LR_{\text{KSFW}}$$

- LR_{KSFW} : Likelihood ratio of KSFW.
 - (I used this with cut base in previous analysis.)



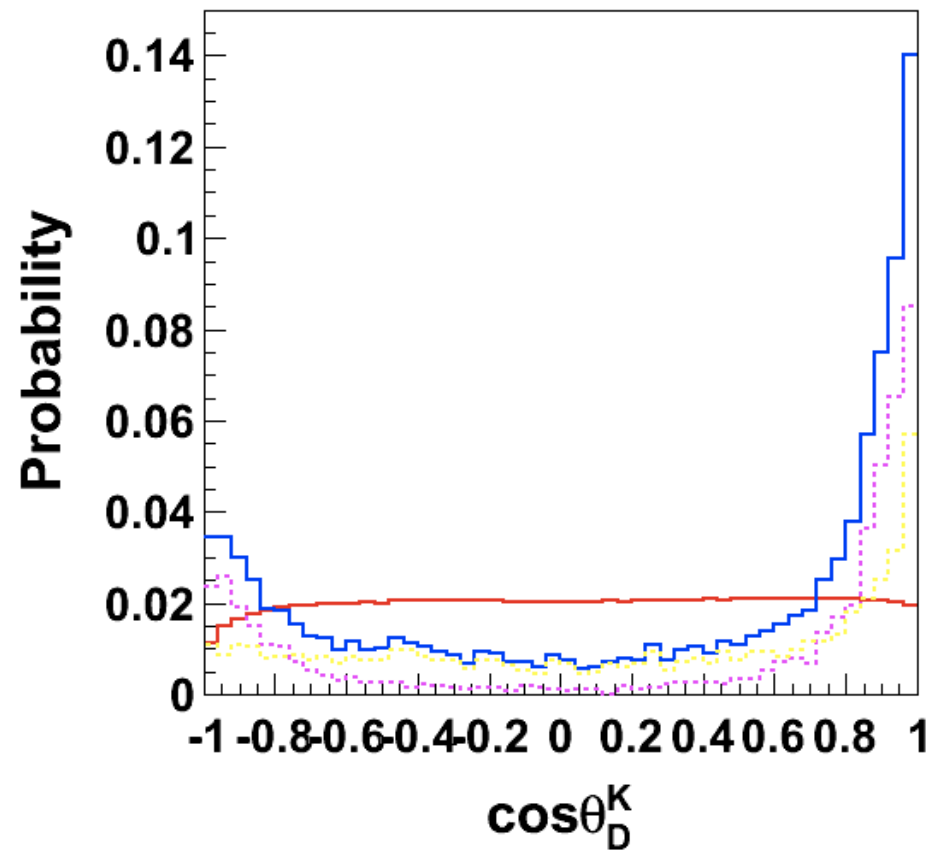
$$|\cos\theta_{\text{thr}}|$$

- $|\cos\theta_{\text{thr}}|$: the absolute value of the cosine of the angle in CM frame between the thrust axis of the B decay and the one of the detected remains.



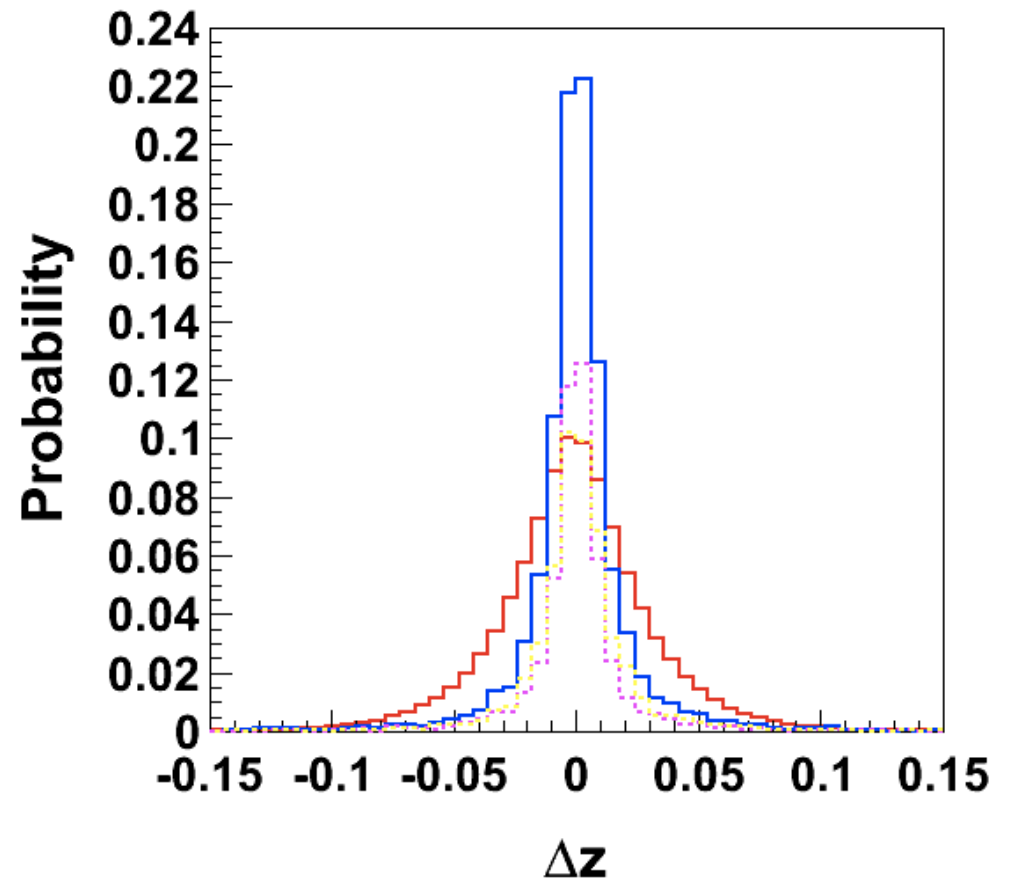
$$\cos\theta_D^K$$

- $\cos\theta_D^K$: the cosine of the angle between the daughter K direction and the opposite direction to B in the D-rest frame.



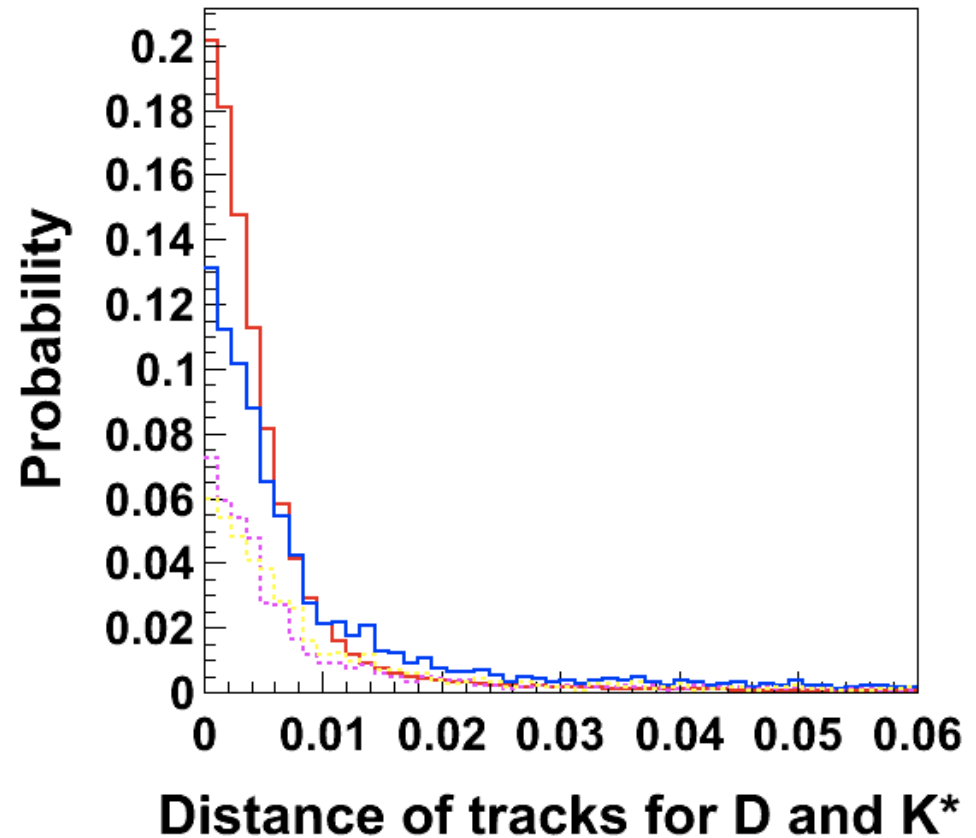
Δz

- Δz : the distance of the reconstructed and tag-side B vertices.



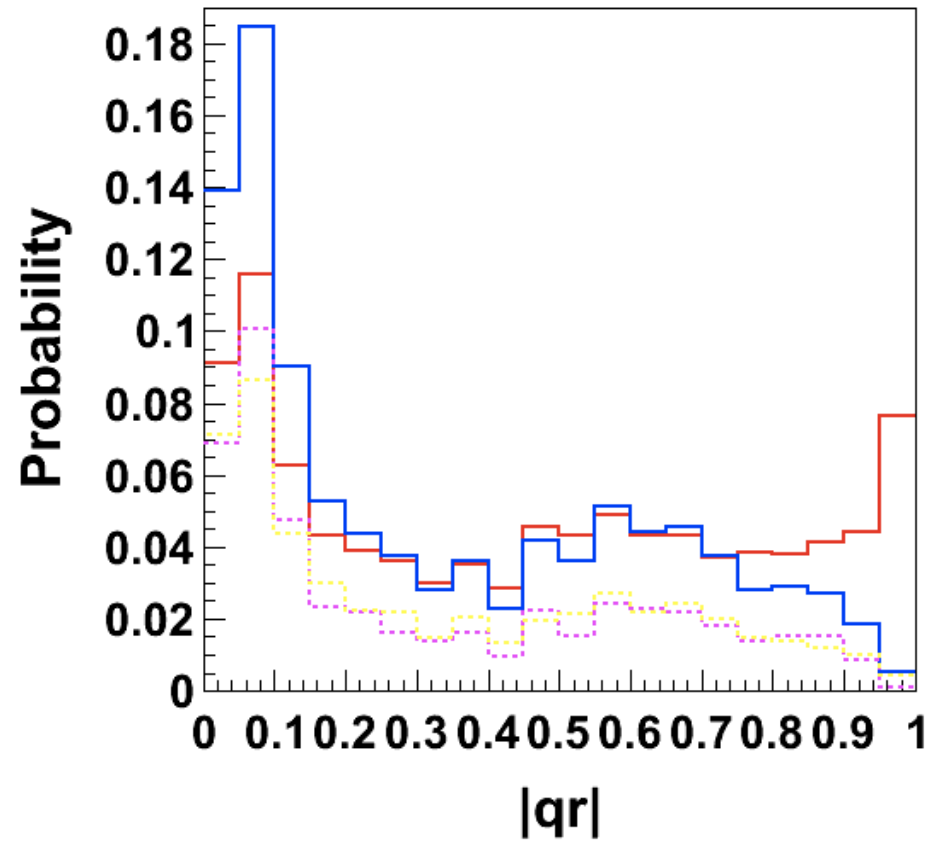
Distance of D K*

- Distance of D K* :
the distance of
closest approach
between the K*
track and the
trajectory of the D
candidate.



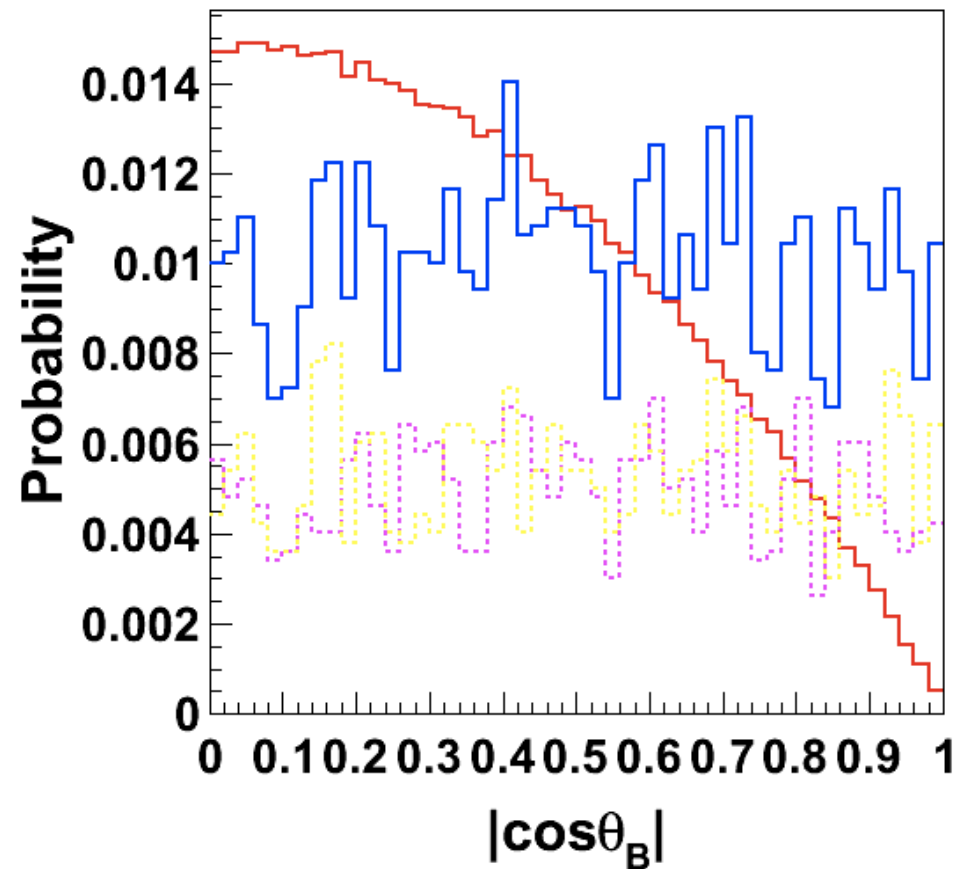
$|qr|$

- $|qr|$: the absolute value of the flavor tagging information qr , where q indicates the b-flavor and r indicates the quality of tagging.



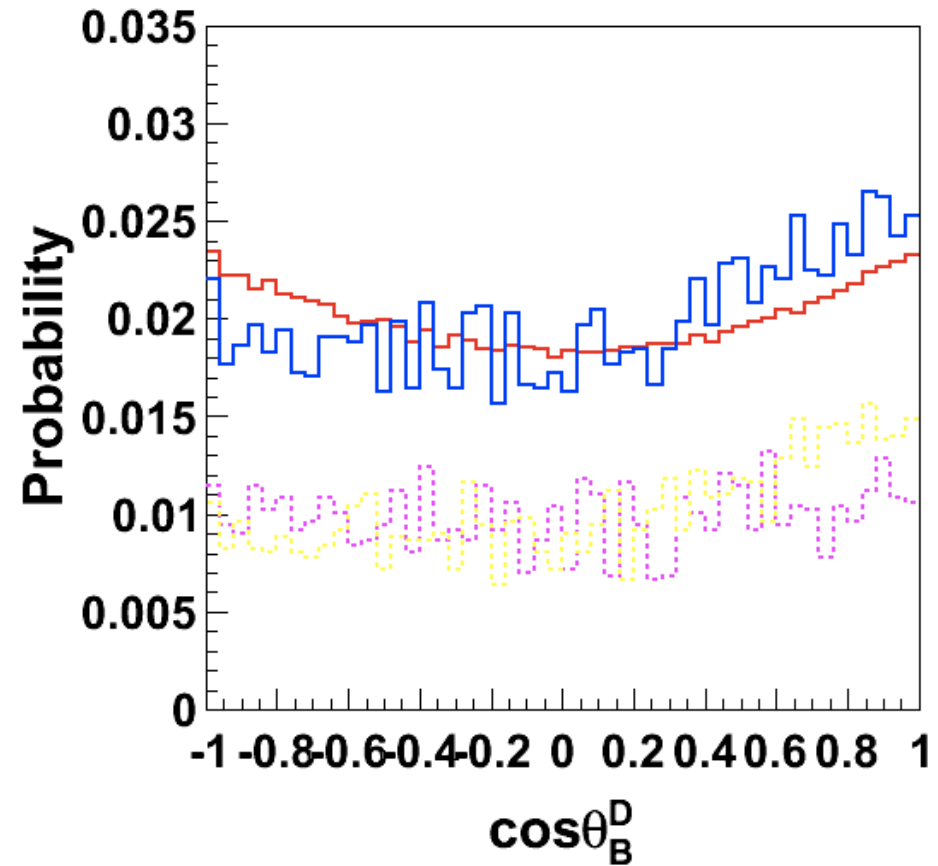
$$|\cos\theta_B|$$

- $|\cos\theta_B|$: the absolute value of cosine of the angle between the B-flight and the beam axis.



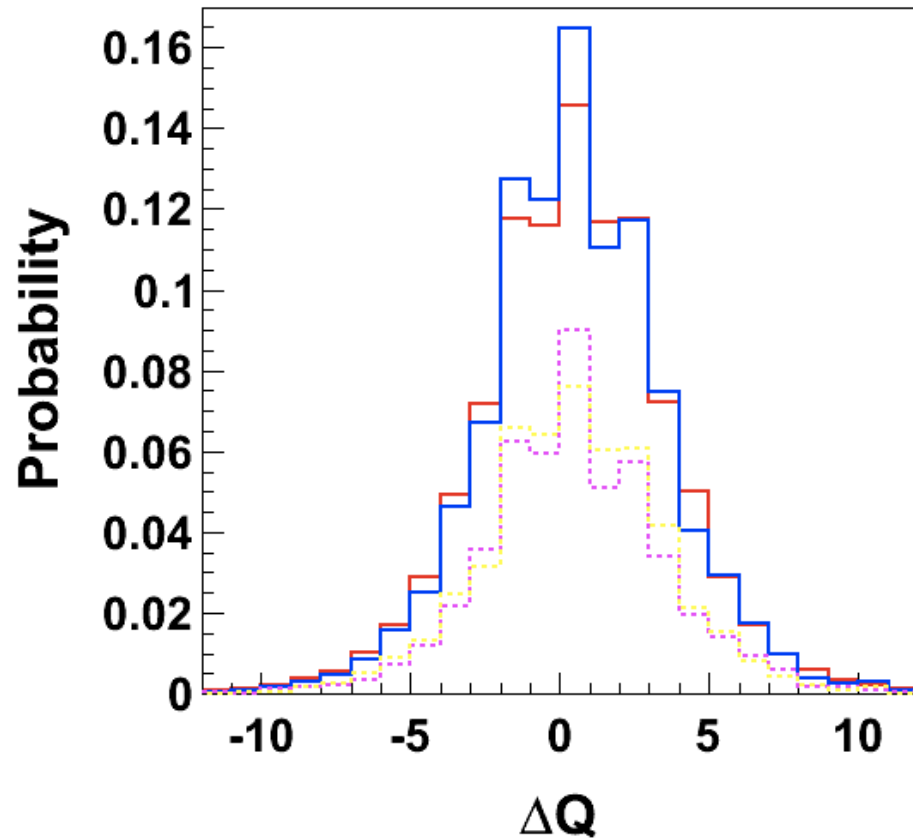
$$\cos\theta_B^D$$

- $\cos\theta_B^D$: the cosine of the angle between the D direction and the opposite direction to $Y(4S)$ in the B-rest frame.



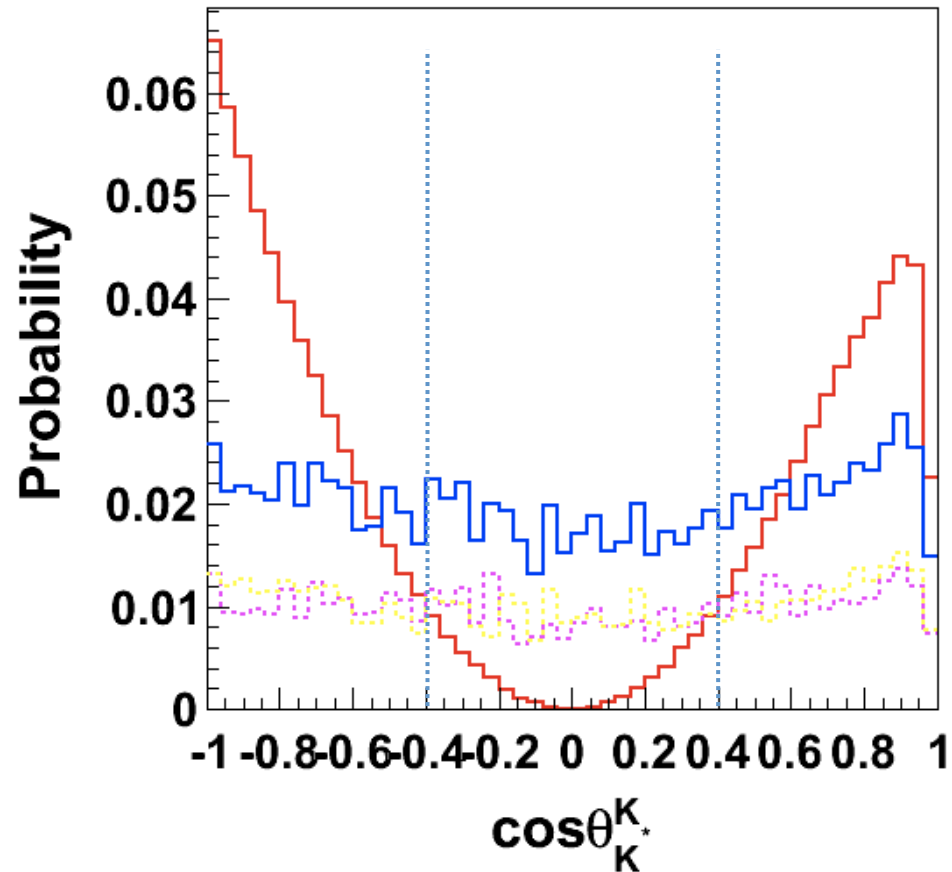
ΔQ

- ΔQ : the charge difference between the sum of the charges of particles in the D hemisphere and the one on the opposite hemisphere, excluding the particles used for the reconstruction of B meson.



$$\cos\theta_{K^*}^K$$

- $\cos\theta_{K^*}^K$: the cosine of the angle between the K direction and the opposite direction to K^* in the B-rest frame.
 - (I used this with Cut base in previous analysis)



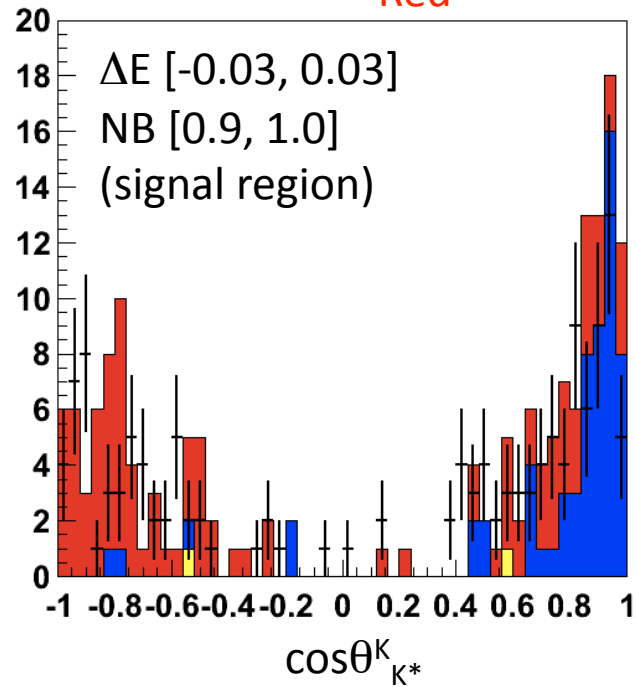
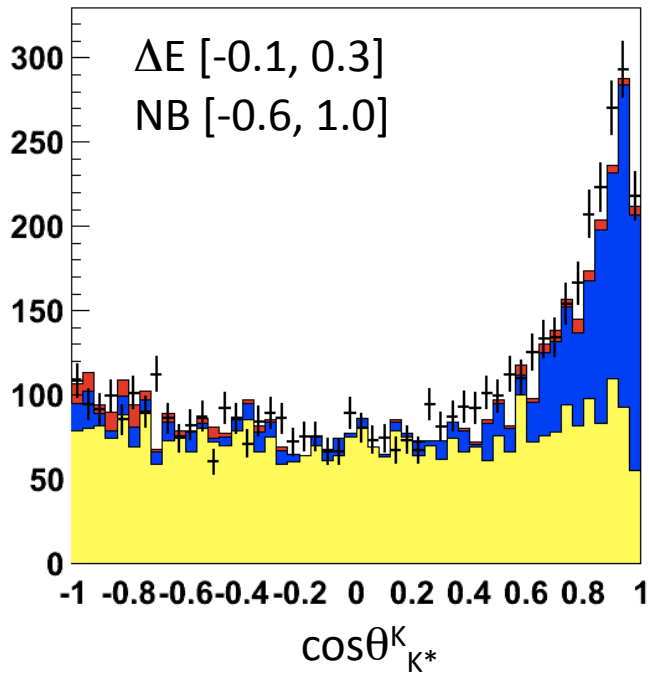
$$\cos\theta_{K^*}^K$$

Dot with error bar : data

Yellow : qq

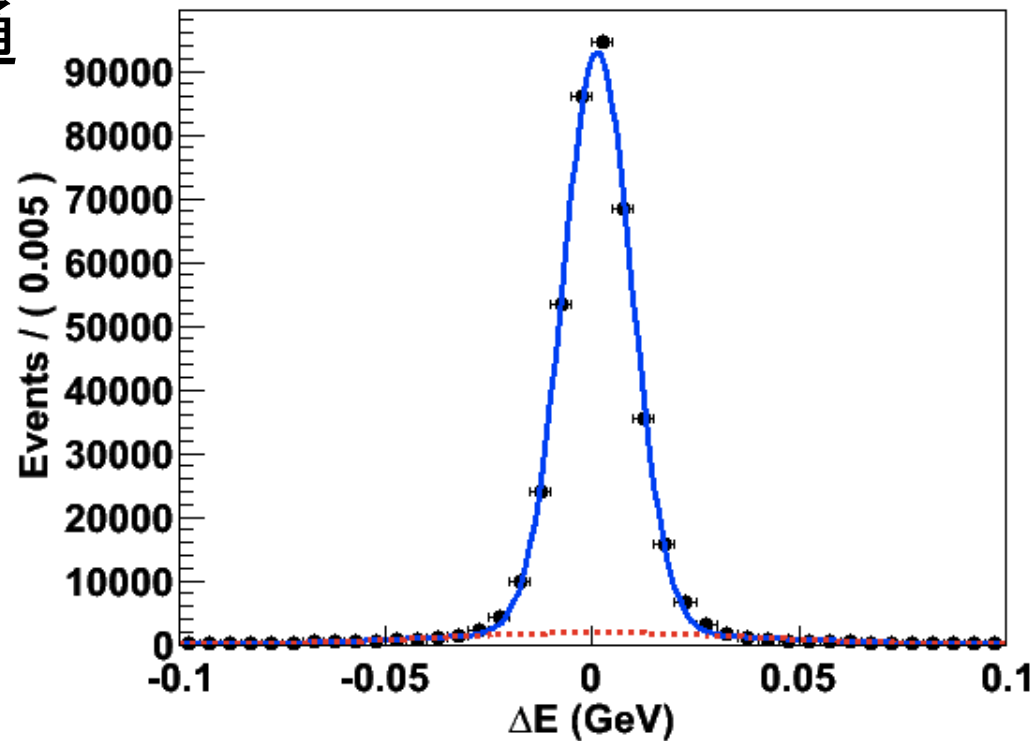
Blue : BB

Red : signal

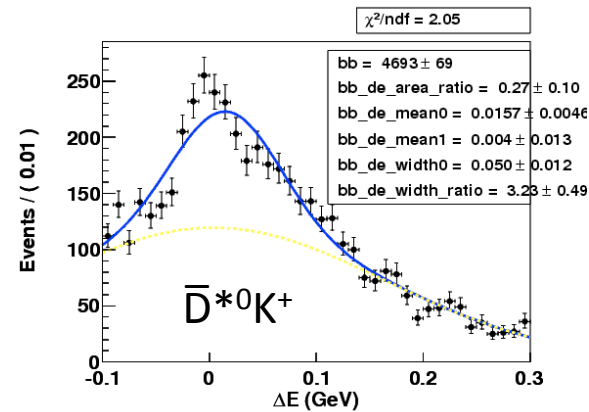
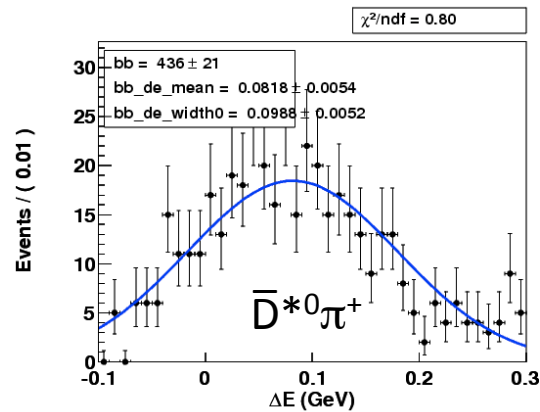
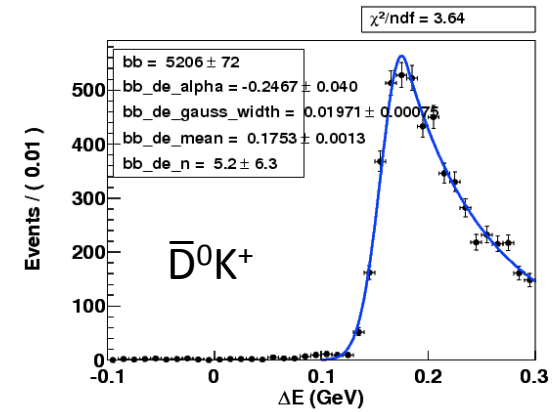
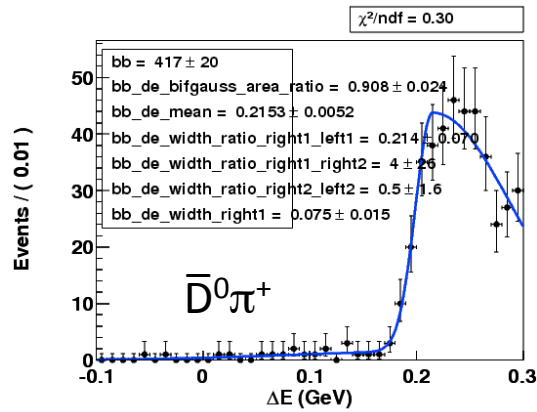
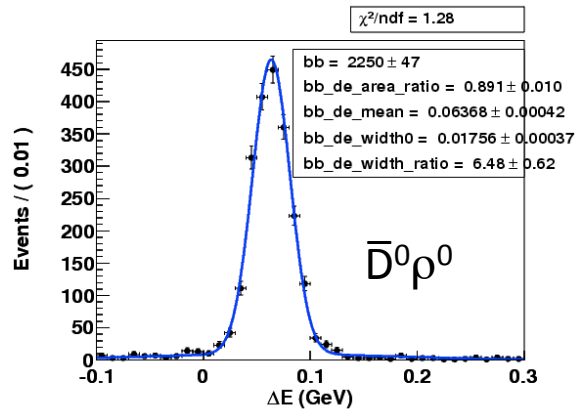


シグナルの ΔE PDF

- 二つのガウス関数の和を使用
 - meanは共通



バックグラウンドの ΔE PDF



$D^{*-}K^{+}$

